

第 61 回大会 研究発表要旨集

一般社団法人 日本オリエント学会

2019 年 10 月 12 日（土）・13 日（日）

明治大学駿河台キャンパス

目次

日本オリエント学会第 61 回大会プログラム	2
第 1 部会	7
第 2 部会	16
第 3 部会	25
第 4 部会	34
第 5 部会	43
第 6 部会	53
ポスター発表	61
会場アクセス・地図	66

日本オリエント学会第 61 回大会プログラム

2019 年 10 月 12 日 (土)・13 日 (日)

会場：明治大学駿河台キャンパス

第 1 日 10 月 12 日 (土) 14 : 00 ~ 20 : 00

公開講演会・学会奨励賞授賞式

会場：リバティタワー 1 階 1011 教室

13 : 30 開場

14 : 00 ~ 14 : 10 開会挨拶

14 : 10 ~ 17 : 00 第 324 回公開講演会「知の集積と伝達—イスラーム文化の一側面」

第 1 講演 後藤裕加子 (関西学院大学文学部教授)

「ペルシア語文化圏の写本制作と宮廷図書館—サファヴィー朝を中心に」

第 2 講演 永田雄三 (公益財団法人東洋文庫研究員、元明治大学文学部教授)

「オスマン帝国近世のアナトリアにおける地方名士の写本収集と図書館の建設—地域社会振興の一環として」

コメント：近藤信彰 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)

17 : 00 ~ 17 : 40 第 41 回オリエント学会奨励賞授賞式

18 : 00 ~ 20 : 00 懇親会 (会場：リバティタワー 23 階 宮城浩蔵・岸本辰雄ホール)

第 2 日 10 月 13 日 (日) 9 : 30 ~ 16 : 35

* 研究発表会 (それぞれの発表は 20 分、質疑応答は 5 分でお願いいたします)

* 会場：リバティタワー 6 階 1065、7 階 1073、1074、8 階 1083、1085、9 階 1096

16 階 1163 (ポスター発表 コアタイム [12 : 50 ~ 13 : 20])

第 1 部会 (6 階 1065 教室)

	時間	発表者	タイトル
1	10 : 00 ~ 10 : 25	竹野内恵太	儀礼的景観の創出とエジプト初期王権の再生産
2	10 : 30 ~ 10 : 55	南澤武蔵	古王国時代の墓に関する双生児研究からの検討—ニアンククヌムとクヌムホテプの事例
3	11 : 05 ~ 11 : 30	石崎野々花	古代エジプト新王国時代における樹木の分類と名称について—東地中海地域からの輸入材を中心に
4	11 : 35 ~ 12 : 00	肥後時尚	古代エジプトの『二柱のマアト』の起源について
昼食休憩			
P	12 : 50 ~ 13 : 20	ポスター発表コアタイム	
5	13 : 30 ~ 13 : 55	山崎世理愛	オブジェクト・フリーズにみるエジプト中王国時代の葬送儀礼と実際の儀礼行為
6	14 : 00 ~ 14 : 25	矢澤健	称号から見たダハシュール北遺跡の被葬者の社会階層に関

			する一考察
7	14:35~15:00	河合望	第4次・第5次(2019年)北サッカラ発掘調査概報
8	15:05~15:30	田澤恵子	古代エジプトにおけるマアトの実践—宗教と社会福祉の相互関係をめぐる視点から
9	15:35~16:00	米山由夏	古代エジプト、サッカラ地域の墓地利用に関する一考察—末期王朝時代からプトレマイオス朝時代にかけて

第2部会 (7階 1073 教室)

	時間	発表者	タイトル
1	9:30~9:55	西秋良宏	西アジア旧石器時代にみられる石刃生産の長期的な変化について
2	10:00~10:25	渡辺和子	メソポタミアの奉納物と奉納文
3	10:30~10:55	細田あや子	メソポタミアの儀礼における媒介者・媒介物
4	11:05~11:30	小泉龍人・小島均・曾我部 雄二	メソポタミア都市形成期の彩文—復元顔料の焼成実験
5	11:35~12:00	渡辺千香子	アッシュルバニパル王ライオン狩り浮彫に描かれた異なる狩猟に関する考察

昼食休憩

P	12:50~13:20	ポスター発表コアタイム	
6	13:30~13:55	青島忠一朗	アッシュルバニパルの王碑文における発話の役割
7	14:00~14:25	山田雅道	エマルにおける「世話」契約—4者システム再論
8	14:35~16:35	企画セッション (14:35~16:35) アッシリアの属国と属州—テル・タバノとヤシン・テペの成果から 沼本宏俊「テル・タバノ出土、中・新アッシリアの遺構と土器変遷」 柴田大輔・山田重郎「テル・タバノ出土アッシュル・ケタ・レシエル2世の記念碑文とその歴史的背景」 西山伸一「考古学から見たヤシン・テペ—新アッシリア時代の拠点都市と属州支配」	

第3部会 (7階 1074 教室)

	時間	発表者	タイトル
1	10:00~10:25	高橋寿光	古代エジプト、青色彩文土器の出土場所について
2	10:30~10:55	和田浩一郎	編み髪の埋納?—アコリス遺跡の出土資料を考える
3	11:05~11:30	山口雄治・紺谷亮一・上杉章紀・下釜和也・千本真	中央アナトリアにおける前期青銅器時代土器の変遷とその年代—キュルテペ遺跡出土資料を中心に

		生・Fikri Kulakoğlu	
4	11:35~12:00	山本孟	ヒッタイト王の神々に対する敬意の表し方
昼食休憩			
P	12:50~13:20	ポスター発表コアタイム	
5	13:30~13:55	土居通正	紀元前1200年前後のキプロス島に於ける土器生産の新たな盛行とその背景
6	14:00~14:25	長谷川奏・徳永里砂・西本真一・恵多谷雅弘	サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の立地条件と構造—初期イスラーム時代の港まちの分布調査から
7	14:35~15:00	安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤健	バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト第5次調査の報告
8	15:05~15:30	藤澤綾乃	ローマ・ビザンツ時代パレスチナにおける教会堂建築の変遷—ユダヤ・サマリア地域を中心に
9	15:35~16:00	津村眞輝子	北シリアのビザンツ時代の墓の副葬品—ガラス玉に焦点をあてて

第4部会（8階1083教室）

	時間	発表者	タイトル
1	9:30~9:55	下山繁昭	高句麗からもたらされた三本足のカラスの紋章の源流と文化の伝播
2	10:00~10:25	田辺理	ガンダーラの仏教彫刻におけるディオニューソス神画像の受容の特徴
3	10:30~10:55	青木健	エーラーン帝国の宗教—マズダー教、ズルヴァーン主義、ゾロアスター教
4	11:05~11:30	新井雅貴	ヘブライ語聖書における「埋葬地」としての水溜めの性質
5	11:35~12:00	関広尚世	スーダン国立博物館所蔵鉄製品の考古学的・文化財学的意義について
昼食休憩			
P	12:50~13:20	ポスター発表コアタイム	
6	13:30~13:55	原将吾	シリア語 Differential Object Marking の地域差について
7	14:00~14:25	内記理	カローシュティー文字の形態変化に関わる考古学的検討—西北インド出土の碑銘資料を中心に
8	14:35~16:35	企画セッション 古代ギリシア・ローマ世界における身振り画像とその形成、変遷、差異のメカニズム—「両手を上げる」身振りを中心に	

		<p>田中咲子「エーゲ時代からヘレニズム時代における『両手を上げる』身振りの編年と意味—哀悼と嘆願を中心に」</p> <p>小堀馨子「帝政期ローマにおける『両手を上げる』身振りの意味の変遷—哀悼・貞節から女神の顕現へ」</p> <p>坂田道生「《ユリウス・テレンティウスのフレスコ》に関する一考察—身振り表現、凶像伝統、神殿と軍隊との関係から」</p> <p>コメンテーター及び司会：長田年弘</p>
--	--	--

第5部会（8階 1085 教室）

	時間	発表者	タイトル
1	9:30~9:55	徳永里砂	初期イスラーム時代ヒジャーズ地方のグラフィティにみられる文面の変遷
2	10:00~10:25	榮谷温子	古典アラビア語文法における「主語」
3	10:30~10:55	五十嵐小優粒	自他動詞と形容詞から考えるペルシア語受身の存在の必然性
4	11:05~11:30	村上武則	最古のクルド語文法書『ガルゾーニ文法』の研究
5	11:35~12:00	江原聡子	ハランのサービア教について—『目録の書』と『古代諸民族年代記』を中心に

昼食休憩

P	12:50~13:20	ポスター発表コアタイム	
6	13:30~13:55	平野貴大	初期のイマーム派における輪廻思想—人間から動物への変態 (maskh) と靈魂の永遠性
7	14:00~14:25	井上貴恵	「陶醉」系スーフィーとその倫理性
8	14:35~15:00	法貴遊	イブン・スィーナで繋がる脳と経験と文法学
9	15:05~15:30	矢口直英	イスラームにおける医学の定義の伝統—『医学典範』後の展開
10	15:35~16:00	相樂悠太	イブン・アラビーの神秘主義的靈魂論の研究—「魂」(nafs)・「心」(qalb)・「靈」(rūh) をめぐって

第6部会（9階 1096 教室）

	時間	発表者	タイトル
1	10:00~10:25	野口舞子	12世紀のマグリブ・アンダルスにおけるフトバ
2	10:30~10:55	大塚修	ティムール朝歴史編纂事業再考—『ジャアファリーの歴史』を中心に
3	11:05~11:30	真殿琴子	「デヴリーイェ」理論に関する考察—ニヤーズイー・ムスリーの論考を中心に

4	11:35~12:00	KHASHAN AMMAR	ハナフィー法学派とシャーフイー法学派におけるワクフ（寄進財産）の基本概念をめぐって—イスラーム経済学から見た考察
昼食休憩			
P	12:50~13:20	ポスター発表コアタイム	
5	13:30~13:55	岩田和馬	18世紀オスマン朝イスタンブルにおける同業組合と宿所（仮）
6	14:00~14:25	成地草太	1860年代前半のオスマン帝国における移民町形成と地元社会—テクフルダー県サライ郡で新設されたクリム・タタールの町の事例から
7	14:35~15:00	矢本彩	20世紀初頭オスマン帝国における「3月31日事件」と宗教学生的事件参加
8	15:05~15:30	福永浩一	近代エジプトにおけるイスラーム主義とキリスト教宣教団体—反宣教運動の言説に関する一考察

ポスター発表（16階 1163教室 コアタイム：12:50~13:20）

	発表者	タイトル
1	柏木裕之・山田綾乃	クフ王第2の船・銅製部品が装着された板状部材の機能同定
2	矢澤健・吉村作治・柏木裕之・山崎世理愛	ダハシュール北遺跡シャフト158の出土遺物と利用歴
3	河合望・松島朝秀・栗本康司・大山幹成・大石岳史・影澤政孝・Gilan Mahmoud Gamal・Ahmed AbdRabou Ibrahim・Hanan Mostafa AbdEl-Aziz・Mohamed Moustafa Mohamed・Ahmed Tarek AbdEl-Aziz・Soraya Muhammed・Hussein Kamal	ツタンカーメン王墓出土の「第2の国王のチャリオット」の復元について
4	高橋寿光	エジプト、ダハシュール北遺跡の青色彩文土器
5	関広尚世	スーダン国立博物館所蔵鉄製品の形式学的検討

儀礼的景観の創出とエジプト初期王権の再生産

竹野内 恵太（日本学術振興会）

本発表は、王墓と儀礼施設である葬送用周壁の立地関係を考察し、エジプト初期王朝時代の儀礼的景観の内容とその創出過程に基づいて王権の再生産に係る実践的活動を論じるものである。

第1王朝の王墓はアビドスに位置し、沖積平野から2kmほどのワディを通過してアクセスできる。第2王朝前半には、王墓が南サッカラに造営され始めた。これに伴い、台地縁辺部に営まれていた高官墓群の選地は、アブ・シール・ワディを指向するように西へ広がり、高官墓→王墓という葬列・行列イベントの流れが完成する。選地変化には、高官墓→王墓というストーリーの中で社会組織・社会階層を再生産することを意図していた背景があった可能性が高い。だからこそ南サッカラというそれまで墓地の存在しなかった無縁の地に王墓を築いた。聖地アビドスのワディを介した儀礼的景観の移植はサッカラの建造環境の変容とともに成立したのである。

しかし、カセケムイ治世時点で、アブ・シール・ワディを挟んで葬送周壁（Gisr el Mudir）を第2王朝前半の諸王墓の対面に造営したことによって、アビドスの周壁→王墓という立地構造とは異なるようになる。例えばワディ入り口の西部分などアビドスと同じ立地構造を再現するように周壁を造営することは可能である。しかし、そうはしなかった。これが示すように、カセケムイが単純にアビドスの景観を再現するのではなく、国土再統一のスペクタクルを創出するために、第2王朝前半でサッカラに王墓を築いた諸王たちへ由緒付ける形で新しい権威構造をメンフィスで展開することを企図していた。

さらに、カセケムイが周壁を王墓と同じ軸線上に造営したことで、双方が西に沈む日の入りを受けられることになる。行列イベントと西方信仰が織りなすスペクタクルの中、儀式の参加者はこうした劇場空間を視認・経験する。この儀礼的景観によって王権と社会組織は再生産された。祝祭・葬祭における行列イベントは、後代の王朝と比較可能であり、ワディと日の入りの景観を舞台装置とした初期王権のパフォーマンスであった。

また、この儀礼的景観の基層は、先王朝時代前半のヒエラコンポリスに求めることができる。IIA-B期ヒエラコンポリスでは、南西方向へ開口する巨大なワディの奥に当時のエリート墓地（HK6）が造営された。ワディを介した西方の奥に住まう祖先という象徴性は、アビドスに受け継がれ、サッカラの儀礼的景観の基層を形成したと考えられる。

古王国時代の墓に関する双生児研究からの検討—ニアククヌムとクヌムホテプの事例—

南澤 武蔵（東京大学教育学部附属中等教育学校）

古代社会においては、双子（双生児）や多胎児が極めて珍しかったためか、その存在が明確に示されている例は多くない。古代エジプトの双生児または多胎児に関する明確な記述は新王国時代のスティとホルのステラ（奉納碑）に残されている。しかし、神話上の表現は古王国時代からあったものの、双生児または多胎児を直接的に示す表現は古代エジプトにおいても稀であった。そのため、実在の双生児または多胎児ではないかと考えられる遺物や遺構は若干の例が知られるにとどまる。その一つが古王国時代のニアククヌムとクヌムホテプのmastaba墓である。

ニアククヌムとクヌムホテプの墓は、ウナス王のピラミッド参道脇に位置し、第 5 王朝末に年代づけられている。墓における 2 人の表現から、双生児ではないかとする指摘がなされてきた。それに対して、ニアククヌムとクヌムホテプは最古の同性愛の例ではないかとする指摘もあり、2 人の関係については議論がなされてきた。近年では、再び双生児として解釈する研究が出てきているが、最終的な結論が出されるには至っていない。いずれの議論も、その関係性が明確に表現されていないため、古代エジプトの銘文や図像の表現方法から解釈が進められている。

しかし、その解釈に一つの問題が潜むのではないかと考える。それは、「双子」と解釈する時に、「双子」の在り方に対するイメージが先にあることである。双生児研究の成果にも言及した研究もあるが、基本的には研究者の既存の「双子」イメージをもとに資料の解釈が行われている。例えば、ニアククヌムとクヌムホテプにおいては一卵性双生児としての見方が示されている。しかし、一卵性双生児と二卵性双生児の違いを図像資料から判断することは不可能である。図像は類似した様式で表されており、似ているかどうかは論じることができない。また、双生児同士の関係性は、本来的にはその 2 人にしかわからないものであり、単純に仲が良いなど決めつけることはできない。こうした点から、そもそも「双生児」の世界とはどのようなものかを検討した上で、銘文や図像を解釈することも必要である。

そこで本報告では、毎年双生児が複数組入学する中等教育学校に勤務している報告者の実体験と、勤務校の中で長年蓄積されてきた双生児研究から得られた知見をもとに、まずは双生児の世界への理解を深めていく。その上で、ニアククヌムとクヌムホテプの墓における表象を「双子」的に解釈することについて再度の検討を加える。

古代エジプト新王国時代における樹木の分類と名称について
—東地中海地域からの輸入材を中心に—

石崎 野々花（早稲田大学）

本発表では、古代エジプトにおける木材利用の様相を明らかにすることを目標に、樹木の分類について再検討する。

古代エジプトでは、様々な木材が副葬品や建材として利用されていた。この木材利用のあり方は、実用と認知に関わる二つの側面に分けて考えることができる。実用的な側面とは、木材加工の技術や各樹種の使い分けなど、物理的な痕跡が残りやすい事柄を指す。一方で、認知については、樹木の分類や価値・意味づけといった人々の心性に関わる事柄を含む。両者は表裏一体の関係にあり、相互に影響を与えあっている。そのため、木材利用の様相について明らかにするためには、双方の視点からアプローチする必要がある。

なかでも、古代エジプト人がどのように樹木を認識し分類していたのかは基礎的な課題として重要である。樹木の分類体系は、その知識体系に結びついているだけでなく、文字資料を分析する上での基盤となるからである。

先行研究では、特定の樹木を指すと思われる語彙が多く確認されているものの、語義の解釈が不明瞭な単語も残されている。とくに、東地中海地域から輸入されていた木材は文字資料に頻出しているにも拘わらず、その解釈をめぐる議論は決着していない（cf. Meiggs 1998; Bardinnet 2008）。

そこで、各単語の入手先と現在および過去の植生分布を比較し、それぞれの単語がどのような樹木を示していたのかを再検討したい。分析の嚆矢として、新王国時代の碑文資料を分析対象とした。その結果として、たとえば *ash* はレバノンシーダー、*mrw* はビャクシン属の数種類を指しており、葉や松毬の形状を弁別基準としていた可能性を提示する。

最後に分析結果も含めて、古代エジプト語における樹木の分類体系について示し、その特徴について考察したい。

参考文献

Bardinnet, T. 2008. *Relations Économiques et Pressions Militaires en Méditerranée Orientale et en Libye au Temps des Pharaons: Histoire des Importations Égyptiennes des Résines et des Conifères du Liban et de la Libye Depuis la Période Archaique Jusqu'à l'Époque Ptolémaïque*. Paris.

Meiggs, R. 1998. *Trees and timber in the Ancient Mediterranean World*. London.

古代エジプトの『二柱のマアト』の起源について

肥後 時尚（関西大学大学院博士課程後期課程）

古代エジプトのマアトの概念は「宇宙の秩序」や「正義」、「真実」等を意味する抽象概念として知られる一方で、これらの概念を司る女神として神格化された。この女神は通常、頭にダチョウの羽根を載せた一柱の女性の姿で描写されるが、エジプト新王国時代以降の「死者の書」をはじめとする一部の資料では、「二柱のマアト」と呼ばれる二柱の女神として現れ、死者の裁判の場面において重要な役割を担う。本来一柱である女神が二柱の女神の姿に変化する事例は古代エジプト宗教においても極めて稀であり、変化の理由やそれぞれの女神の役割に関して研究者によって多様な解釈が示される一方で、依然として最終的な結論には至っていない。また、先行研究の多くは「死者の書」を中心とした新王国時代の史料に依拠する傾向にあり、エジプト中王国時代以前の史料の分析は十分になされていない。そのため、「二柱のマアト」の起源にふれる議論や史料研究は依然として不足している。

このような背景を踏まえ、本発表では「二柱のマアト」の起源を探る研究のひとつとして、多様な図像表現を含む「死者の書」と併せて、先行研究で十分に検証されていない中王国時代以前の資料上の「二柱のマアト」に注目する。「二柱のマアト」の記述は、「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」といった葬祭文学に記される一方で、王の年代記を記す所謂パレルモ・ストーンにも見受けられた。これらの史料の検証の結果、「二柱のマアト」を示す語 *mAaty* の起源が王の儀礼に使用された船の名称にあり、後の時代に二柱の神格として再解釈されたことが推察された。

オブジェクト・フリーズにみるエジプト中王国時代の葬送儀礼と実際の儀礼行為

山崎 世理愛（早稲田大学）

古代エジプトでは様々な葬送儀礼が行われたが、中でも供物儀礼は重要な位置を占める。中でも、埋葬時および埋葬が終わり一定期間経過した後に地上でも行われる食糧供物儀礼が主要であり、当該儀礼は考古資料（動物骨・土器・石製容器等）に加え文字（供物リスト、コフィンテキスト等）、図像（壁画、ステラ、棺等）資料として残っている。豊富な文字資料からは、食糧供物儀礼のプロセスが復元され、考古資料の分析からは、実際の食糧供物儀礼行為や土器の機能が解明されている。

しかしながら、実際には供物儀礼は食糧だけではない。葬送時に一度のみ行われる食糧以外の供物（装身具、殻笄、杖類など）儀礼も存在したのである。当該儀礼では、装身具などが供物として被葬者のもとへ運ばれたことが知られているが、実際どのように儀礼が行われたかは不明瞭である。食糧供物儀礼と比べて、食糧以外の供物儀礼に関する文字資料の数が少ないことがその理由の一つに挙げられる。そのような中、オブジェクト・フリーズと呼ばれる中王国時代前期の箱型木棺内側に描かれた装飾帯には、葬送儀礼で必要とされた器物の図像がそのものの名称や配置場所を記したラベルとともに示されている。そして、その葬送儀礼とは主に食糧以外の供物儀礼なのである。行為自体に関する情報ではないものの、実際に墓から出土する副葬品がどのような意図のもと選択されたのかについて考える上で重要な資料であると言える。オブジェクト・フリーズに描かれた図像・ラベルを精査することで、当時の葬送儀礼のあるべき姿の一側面を明らかにすることが出来るのである。そこで本発表では、オランダ近東研究所（NINO）に所蔵されている未報告の木棺アーカイブ写真資料（De Buck archive photos）を主な対象資料とし、同一棺における図像の組み合わせやラベルとの関係性を分析する。そして、食糧以外の供物儀礼の「理想」とはどのようなものであったのかについて検討したい。さらに本発表では、オブジェクト・フリーズの検討から導き出した「理想」を踏まえ、実際には当該儀礼がどのように実践されたのかを考える。特に副葬品配置の分析から儀礼のプロセスと配置によって最終的に形成された空間の復元を試みたい。

中王国時代は食糧と関連しない副葬品が本格的に利用され始めた時期であり、当該期における葬送儀礼を解明する上で食糧供物にのみ注目するのでは不十分である。むしろ、食糧以外の供物儀礼にこそ当該期の独自性が見られると考えられるのである。したがって、本発表ではこれまであまり注目されてこなかった葬送儀礼の重要性を提示することも目的の一つとしている。

称号から見たダハシュール北遺跡の被葬者の社会階層に関する一考察

矢澤 健（東日本国際大学）

ダハシュール北遺跡の中王国時代の墓地は、南東の第 12 王朝センウセレト 3 世ピラミッド周辺墓地と南サッカラの第 13 王朝のピラミッド群の周囲に広がる墓地の近傍に位置し、これらの支配層の墓地とほぼ同時期に造営されたと推測されている。墓の位置関係や出土遺物の内容から見て、ダハシュール北遺跡の被葬者は支配層に次ぐ社会階層の人々によって構成されていた可能性を発表者は過去に指摘した。本発表では遺構・遺物の分析に加えて、称号の視点からダハシュール北遺跡の被葬者の社会的位置付けについて考えてみたい。

本遺跡で被葬者の称号が判明している例は希少である。本発表では 2008 年第 14 次調査で発見されたシャフト 58 に焦点を当てたい。被葬者の名前はセンウセレトであり、*nty m srwt* という称号だけが棺に書かれていた。シャフト 58 は発表者が過去に発表した墓のサイズ分類では Large に属し、この墓地で最大の部類に入る。棺は第 12 王朝後期以降、出土土器は第 12 王朝後期から第 13 王朝初期に年代づけられる。

nty m srwt という称号は壁画、棺、スカラベ型印章、ステラ、パピルス文書等で確認されている。特筆すべきは新王国時代のテーベの貴族墓に刻まれた「宰相の役目 (The Duties of the Vizier)」と呼ばれる碑文で、原本は中王国時代後期に制作されたと推測されている。この碑文によれば、*nty m srwt* は宰相によって任命され、エジプト各地に配属されて 4 ヶ月毎に宰相に報告する役割が与えられていた。このことは、*nty m srwt* が当時の中央の統治に強く関わっていたことを示している。

一方、中王国時代の称号は「職務の称号」と「序列の称号」に分けられるとされている。「序列の称号」は宮廷での地位を示すもので、必ず「職務の称号」の前に記載され、「職務の称号」は通常名前の直前に記載される。「序列の称号」は一部の支配層のみが使用していたもので、シャフト 58 を含め *nty m srwt* は「序列の称号」を通常持たない。このことは、*nty m srwt* は中央の行政に関わっているとはいえ、「序列の称号」を持つ最上層には属していなかったことを意味する。ダハシュールの場合、「序列の称号」の所有者はセンウセレト 3 世ピラミッド北側の墓地に多く見られるが、本遺跡では今のところ確認されていない。

以上から、称号という視点を加えた分析からも、これまで指摘されてきたダハシュール北遺跡の被葬者像を裏付けると結果が得られた。

第 4 次・第 5 次（2019 年）北サッカラ発掘調査概報

河合 望（金沢大学）

古代エジプト新王国時代の北の中心地であったメンフィスの墓地であるサッカラについては、これまで網羅的な調査が実施されてこなかった。サッカラにおいて新王国時代の墓を新たに発見、調査することにより、これまで南の中心地テーベに偏重してきた新王国時代史の再構築が期待される。このような問題意識のもとに、2015 年度からサッカラにおける新王国時代の墓をテーマとした調査研究を開始した。踏査、測量、物理探査の結果、北サッカラ台地の東側斜面が、未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いと推定された。2017 年に試掘調査（第 3 次調査）を実施し、付近に近年の攪乱を受けていない新王国時代の遺構が存在することが期待された。

この成果を受けて、2019 年 2 月から 3 月にかけて実施した第 4 次調査において、C 地区の試掘トレンチの北側にトレンチに平行して約 20m の幅の発掘区の調査を実施した。新たな発掘区の発掘調査では、北端部に露呈した岩盤の直上に石灰岩の壁体が検出され、その約 4.5m 下からは壁体にほぼ直交するモルタルが塗られた垂直の壁体が南北に位置し、その壁体の間にヴォールト天井の一部が確認された。これらは全て埋蔵されている岩窟墓に関連する遺構であると解釈され、特に南北の垂直の壁体とヴォールト天井は、岩窟墓の入口部を構成するものと推定された。また、壁体の置かれた岩盤の露頭の東側からは、グレコ・ローマン時代に年代づけられる単純埋葬が 3 体検出され、その上の層には紀元後 1 世紀頃のローマ時代の土器、テラコッタ像などで構成される廃棄活動の痕跡が検出された。

続いて、2019 年 7 月から 9 月にかけて第 5 次調査を実施した。第 5 次調査では、第 4 次調査の発掘エリアの北に位置する大量の土砂からなる排土を重機で除去し、その後第 4 次調査の発掘区の北に新たな発掘区を設け、調査を実施した。排土は主に英国の W.B. Emery が北サッカラ台地上の初期王朝時代のマスタバ墓群を発掘した際の排土であることが判明した。この排土の除去後、第 4 次調査で検出されたヴォールト天井の延長線上に紀元後 1 世紀頃のローマ時代の活動とみられる日乾レンガ遺構が検出された。また周辺から第 4 次調査で確認されたような単純埋葬が 4 体検出された。ヴォールト天井の上面を発掘したところ、ローマ時代の日乾レンガ遺構と接続することが判明し、日乾レンガ遺構は、ヴォールト天井の一部を破壊し、再利用したものであることが判明した。ヴォールト天井は岩窟墓の入口に繋がる通廊であることが明らかとなった。本発表では、これらの第 4 次調査と第 5 次調査の成果の概要について報告する。

古代エジプトにおけるマアトの実践—宗教と社会福祉の相互関係をめぐる視点から—

田澤 恵子（古代オリエント博物館）

昨今、宗教と社会福祉をめぐる議論が活発化しており、そのような状況下で研究課題「古代オリエントにおける宗教と福祉の関わり」の解明が設定された。本発表では、この課題に即した比較研究プロジェクトの一環である古代エジプトにおける宗教と福祉の関わりについての考察結果を報告する。

古代メソポタミアの神話には、現実社会に存在する障害者や不妊・流産などの現象について、その理由や起源を説明するもの（『エンキとニンマハ』など）がある。また、その他の碑文資料からは、同地域における「孤児」や「寡婦」など一般的に社会的弱者とされる人々に対する当該社会の保護システムについて読み取ることができる（ラガシュ第Ⅰ王朝最後の王ウルイニムギナの『改革碑文』、『ウルナンマ法典』、『ハンムラビ法典』、ウガリト神話の『アクハト物語』など）。一方、古代エジプトの場合、神話の中に上記のような社会的弱者の存在を説明する直接的な記述を見出すことは容易ではなく、またそういう人々を保護するようなシステムや法律の存在を示唆する資料も多くない。従って、両地域における障害者や社会的弱者を保護する仕組みについて一概に比較することは難しいが、その違いこそが両文明社会の特徴を示すものとも言える。

古代エジプトにおける障害者に関するこれまでの研究によれば、古代エジプトでは何等かの障害が宗教職もしくは公職に就くことを妨げることはなく、社会的高位に就いた者もいる一方で、障害のある人々への態度を改めるようにとの訓辞（『アメンエムオペトの教訓』など）も残っており、障害者への態度は一様でなかった。また、孤児や寡婦などに対する社会的取り組みについては、資料の少なさからそれほどよくわかっていない。

しかしながら、古代エジプト人にとって人生の最終目標であった死後の再生・復活のために必要な「マアトの実践」をめぐる記述の分析からこの問題について検討することが可能であることがわかった。本発表では、以上の状況を踏まえ、古代エジプト中王国時代のエリート層を中心とした自伝資料と新王国時代の死者の書第125章の分析を通して、「マアトの実践」から読み取れる古代エジプトの宗教と社会福祉の関係について通時的に論じたい。

尚、本研究は、2017年度—2019年度科学研究費補助金基盤研究B（一般研究）17H02275「古代西アジアにおける宗教と福祉の相互関係をめぐる総合的実証研究」（研究代表者：月本明男）により実施された。

古代エジプト、サッカラ地域の墓地利用に関する一考察
—末期王朝時代からプトレマイオス朝時代にかけて—

米山由夏（鶴見大学）

サッカラ地域は、古代エジプト人にとって神聖な地域として認識され初期王朝時代から王や高官の墓が造営されてきた。本発表で対象とする末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の墓地の利用に関しては、サッカラ地域に限らず未だ不明瞭な点が多いと考えられる。墓域は、社会的階層によってある程度決まった場所に埋葬されると推察され、本発表ではサッカラ地域における、エリート層と非エリート層の埋葬をまとめ、当該地域の墓地が古代エジプト王朝史の終わりである末期王朝時代から、非エジプト人によって統治されたプトレマイオス朝時代にかけてどのように利用されてきたのか考察したい。

まず末期王朝時代では、ピラミッドに近接して高官の墓が造営された。末期王朝時代は、古王国時代のジェセル王やイムホテプの信仰が盛んになり、このような宗教的な背景に起因してピラミッドの周辺が選地されたと考えられている。また、あらゆる階層の人々が神々へアクセスしやすくなる時代であるとも考えられている。これまでは神聖化され、ある程度の階層の高い被葬者のみ埋葬されてきたサッカラ地域に、低階層と考えられる単純埋葬も多く確認されるようになったのは、上述したような宗教的変化が反映されていると考えられるであろう。単純埋葬は、ピラミッドから離れたアヌビエイオンやアケトヘテプのmastaba墓周辺に造営されており、エリート層の埋葬と比較すると、よりピラミッドから離れて埋葬されている様子が看取される。一方でプトレマイオス朝になると、高官墓は当時の中心地であったアレキサンドリアか、かつての中心地であったテーベに造営されサッカラ地域は単純埋葬の被葬者を中心に墓地が利用されるようになる。単純埋葬の中でも、より手厚い埋葬はピラミッドの付近に埋葬され、台地の縁辺部により簡素な埋葬が見られる。プトレマイオス朝は、ギリシャ、マケドニア出身の王に支配される時代であり、大きく社会が変化する時代である。このような中でもサッカラ地域は末期王朝時代のエジプトの慣習を継続し、単純埋葬の中に存在する階層ごとに墓地の選択が行われていたと考えられる。

以上のように、サッカラ地域は末期王朝時代からプトレマイオス朝時代にかけて、かつてと同様に神聖な場所として古代エジプト人に認識されていた様子が看取された。しかし埋葬される被葬者の階層は徐々に低くなっていく様子が明らかとなり、エジプト王朝史の終焉を反映した墓地利用の変化であると言っても過言ではないであろう。

西アジア旧石器時代にみられる石刃生産の長期的な変化について

西秋 良宏（東京大学総合研究博物館）

ヒトは600万年以上も前にアフリカに出現し、200数十万年前には石の道具（石器）を使いこなすようになった。以降、彼らの道具作りは時代的に進展したが、その様相はヒトの認知的、行動的進化を物語る物的証拠として注目されてきたところである。この発表では、現生人類（ホモ・サピエンス）のアフリカにおける出現からユーラシア各地への拡散にかかわる時期、約30万～3万年前における石器製作技術を検討し、この間の石器技術とヒトの進化について考察するものである。

注目するのはいわゆる石刃生産である。石刃とは長さが幅の2倍ないしそれ以上ある縦長の石片である。その組織的生産は後期旧石器時代ホモ・サピエンスの行動を特徴付けると考えられていたこともあったが、現在では事情が変わっている。ホモ・サピエンス登場以前の50万年前にもさかのぼる製作例がアフリカ各地で報告されているほか、ユーラシアでも少なくとも前期旧石器時代末の約30万年前には石刃生産が始まっている地域があることが明らかになっている。

では、そうした初期の石刃生産と後期旧石器時代のそれとはどこがどう違い、どのような系統的、進化的関係にあるのか。この発表では、それを、西アジア・レヴァント地方で得られた証拠を使って議論する。扱うのは、タブン、ドゥアラ、デデリエなど演者自身が実地に分析してきた石器資料である。計測、分類結果を編年的に整理し、レヴァント地方における前期旧石器時代末から中期旧石器時代、そして後期旧石器時代前半にかけての石刃生産の実態について報告する。そして、その結果をもとに、石刃生産が初期人類の行動進化のどのような側面を表現しているのかについて論じる。

結論を得るには時間がかかるが、既存のデータは石刃生産がきわめて文化的な所産であることを示唆している。すなわち、特定の認知的ブレイクスルーがもたらしたものではなく、各地の歴史的背景を考察した上でその出現や発展を考察すべきことを示している。

メソポタミアの奉納物と奉納文

渡辺和子（東洋英和女学院大学）

メソポタミアでは奉納物とされる多くの物が出土しているが、その中には奉納文が刻まれている場合もある。以前は、奉納物は考古学や図像学の、奉納文は文献学の研究対象となっていたが、双方を総合的に考察することによってもたらされる知見がある。

神、または神殿に奉納される物には目的があるが、奉納文によって説明されていない限り、その目的は明白ではない。そのような指摘を踏まえて E. A. Braun-Holzinger は初期王朝時代から古バビロニア時代までの「奉納文をもつ奉納物」を分析し、それらを分類した（*Mesopotamische Weihgaben der frühdynastischen bis altbabylonische Zeit*, 1991）。

「奉納文」は通常、誰かが神に何かを願って、ある奉納物を神に奉納することを、その奉納物に記したものである。比較的長文の奉納文では、神に呼びかけて、奉納者である自分の功績を訴え、長寿、安寧などの幸福を見返りとして神から与えられることを求めている。また、しばしばその奉納物を破損する者への呪いの言葉も付されている。さらに「奉納文」の一つのタイプとして、自分にとって大切な人（家族や上司）の幸福を願う場合、またそれに加えて、自分の幸福を願う場合もある。奉納者が王である場合は「王碑文」の中に含まれることも多い。

このように奉納物、奉納文、王碑文のようなカテゴリーによって分類され、別々に研究されていた結果、見えにくくなっている事柄もあるため、本発表ではそれらに着目して考察する。

メソポタミアの儀礼における媒介者・媒介物

細田 あや子（新潟大学）

メソポタミアのアーシプ (*āšipu*) という職能者について、昨今研究が進んでいる。アーシプと対になって議論されるアスー (*asû*) という職種とあわせて、それらの定義が再考されている。アーシプは *exorcist*、アスーは *physician* と訳されることが多いが、それぞれこの英単語だけでは包括しきれない事柄を行っていたと考えられる。

「呪術」や「医術」の文書が新しく解読されている研究動向をうけ、アーシプの行った儀礼を考察して、アーシプの特徴を明らかにすることが主要な課題である。そこで本発表では、アーシプが行ったさまざまな儀礼のなかから、像を用いる儀礼に着目する。

神像の「ミス・ピー」(口洗い) 儀礼は、神像が制作されたとき、または破損した神像を修復する際に行われる儀礼である。他方、口洗いは神像以外でも、王やアーシプ自身、一般の個人、雄牛、羊などの動物、つまり生物に対してもさまざまな儀礼で行われた。雄牛の口洗いは、その皮が太鼓などに用いられる際の儀礼で行われた。さらに王の地位を示す表章(王冠、笏など)や、革袋、松明など無生物のものに対してもなされた。このように口洗い儀礼といっても、神像に対する2日間のおおがかりな儀礼から、ある儀礼の一部の動作としてなされる場合がある。

さらにアーシプ自身が粘土やタマリスクで護符や小像を作り、建築物の出入口付近に埋める除災や招福の儀礼がある。

このようにアーシプの儀礼には、目的や理論によって像の扱い方に違いがあることについて、また、アーシプ及びその儀礼における「媒介」の機能について論じる。

メソポタミア都市形成期の彩文—復元顔料の焼成実験—

小泉 龍人（早稲田大学総合人文科学研究センター）

小島 均（茨城県産業技術イノベーションセンター 笠間陶芸大学校）

曾我部 雄二（茨城県産業技術イノベーションセンター 笠間陶芸大学校）

オリエントの中心に位置するメソポタミアでは、古くから多様な焼成技術が開発されてきた。なかでも彩文土器を焼成する技術は卓越しており、約7000年前の都市形成期には、高温で焼き上げられた彩文土器がメソポタミア周辺の広範な地域に普及していた。そこで発表者は、メソポタミア都市形成期における巧みな焼成技術を解明するために、彩文土器に使われていた顔料に注目して復元焼成実験を行った。

メソポタミア都市形成期のサラット・テペ遺跡（トルコ南東部、ティグリス川上流域）で発表者（小泉）が一般住居址（北方ウバイド後期後半頃）から顔料塊を検出した。この顔料資料の元素組成を参考にしながら、二酸化マンガン（ MnO_2 ）と第二酸化鉄（ Fe_2O_3 ）の成分比率を変えて復元顔料を数通りに調合し、同遺跡出土の日干しレンガをもとに復元した粘土試料にそれぞれの復元顔料を塗彩した。これらの復元顔料試料を、酸化・還元雰囲気、温度帯（900℃、950℃、1000℃）、保持時間（10分、30分）を変えて焼成した。還元焼成の条件としては、800℃以上の昇温～保持～冷却時の温度帯を還元雰囲気に保った。

酸化・還元雰囲気での焼成実験の結果、復元顔料試料をX線回折（XRD）により分析したところ、輝石類（Pyroxene）やゲーレンナイト（Gehlenite）など、高温焼成により生成される鉱物を同定した。この結果は、サラット・テペ出土の彩文土器は900～1000℃で焼成されていたとするこれまでの分析成果を裏付けることになった。また、還元雰囲気で焼成した復元顔料試料のほとんどでは鉄鉱石（Hematite）が消失して、磁鉄鉱（Magnetite）がわずかに認められた。

復元顔料試料は、酸化雰囲気の焼成で赤褐色から黒褐色を示し、還元雰囲気の焼成では黄褐色から黒褐色となった。二酸化マンガンを添加しない復元顔料試料は焼成温度や保持時間によらず赤褐色になったが、二酸化マンガンの添加により高い焼成温度でやや黒味を帯びた色調に変化する傾向が観察された。

本発表では、こうした焼成実験の成果をもとに、顔料成分の比率、酸化・還元雰囲気、焼成温度、保持時間などの諸要因がどのように彩文顔料の発色に影響を与えていたのかについて報告し、メソポタミア都市形成期の焼成技術について論ずる。

アッシュルバニパル王ライオン狩り浮彫に描かれた異なる狩猟に関する考察

渡辺 千香子 (大阪学院大学)

アッシュルバニパル王 (前 668～631 年頃) がニネヴェに建立した北宮殿には、壁面装飾に数多くの石製浮彫が使われた。中でも王のライオン狩りの主題は、複数の広間や通路の壁面浮彫に表現され、王宮装飾の重要な位置を占めている。昨年、日本の日本オリエント学会において、発表者は J. ノヴォトニーと共著で、浮彫に描かれた雄ライオンの描写に注目し、たてがみの一部を成す「頬ひげ」の描写が大きく 2 種類に分けられることを報告した。この様式の違いについて、発表者は既に 1986 年に提出した卒業論文で触れ、当初は彫刻家グループの流派の違いを反映したものではないかと考えた。しかし改めて分析したところ、異なる頬ひげのパターンは、一方のライオン (タイプ B) の身体サイズが一貫して他方 (タイプ A) の約 1.5 倍の大きさを有し、単なる生育環境の違いで生じる違いとは考えにくいことが判明した。一般に、古代メソポタミアに生息したライオンはアフリカ種に比べて小型のアジア (インド) 種であったとされるが、それはイラクのライオンが絶滅する前に現地で目撃された個体情報に基づく。すなわちアッシュルバニパル浮彫の 2 種類のライオンのうちの一方 (タイプ B) は、未知の品種 (亜種) であった可能性が考えられ、異なる頬ひげの表現は、異なるライオンの種類を彫刻家が描き分けようとした意図したものであったと推測される。アッシュルバニパルの浮彫研究において、ライオンの頬ひげの違いについて扱った先行研究はないため、この点で本研究は新たな学術知見の構築に寄与する。

北宮殿の浮彫では、ライオンは王の狩猟 (C, S, S¹ 室・傾斜通路 R) のほか、王宮庭園 (E 室) を描いた情景の中にも登場する。後者は飼育慣らされたライオンで、頬ひげはタイプ A の特徴を呈し、身体の小さいタイプのライオンであったことがわかる。一方、タイプ B のライオンは、王が平原で行った野生の狩猟場面に集中して登場することから、主に野生に生息した品種であった可能性が高い。また、アッシリア王碑文には、王が生け捕りにしたライオンを繁殖させたことを記した記録があり、E 室のライオンは実際にアッシュルバニパルの時代にライオンが飼育されていたことを物語る。C 室の壁面に描かれた王のライオン狩りは、①北東～南東壁面に描かれた一連の狩猟場面、ならびに②南西壁面に描かれた狩猟場面、から成る。どちらの壁面にも王が戦車から獲物を狙う狩猟場面が描かれ、このうち北東～南東壁面は、武装した兵士が囲い込むアリーナ内に合計 18 頭のライオンが描かれている事実から、テキスト K 6085 に記された狩猟であったことが指摘されている (Weissert, E. 1997: 344–345)。一方、反対側に位置する南西壁面の狩猟場面をどう解釈すべきかについて、これまで有力な解釈は提示されなかった。最近、アリーナ内に描かれたのと同じ狩猟が C 室全体を右回りと左回りに連続して循環するという見解が発表されたが (Nadali, D. 2018: 213–217)、確かな根拠が乏しく説得力に欠ける。本発表では、南西壁面ならびに北東～南東壁面の各場面に描かれたライオンの種類を分析し、それぞれの壁面に別の種類の王の狩猟が描かれていたことを明らかにする。

アッシュルバニパルの王碑文における発話の役割

青島 忠一朗（中央大学人文科学研究所）

アッシリア王アッシュルバニパル（治世前 668-627 年）の王碑文は、詩的表現を豊富に用い、技巧を凝らして書かれた文学的なテキストとしても知られている。アッシュルバニパルの王碑文の際立った特徴の一つは、神々や王そして王の敵による発言を直接話法で引用する点である。アッシリア王碑文は基本的に王が一人称で語る形式で記され、エサルハドンとアッシュルバニパルの王碑文を除くと、登場人物の発言が直接話法で引用されることは稀である。

エサルハドンの王碑文における発話を考察したジェラルディは、エサルハドンの王碑文において発話はこの王の即位の経緯を主題とする「弁明」とバビロン再建の記事に集中し、異例な出来事に対する王の正当性を強調する役割を果たしたと指摘する。

アッシュルバニパルの王碑文に見られる発話の事例は、エサルハドンの王碑文における事例よりもはるかに数が多く、発言者の種類も増え、発言内容も長いものとなっている。発話がアッシュルバニパルの王碑文の高い文学性に寄与していることは間違いないが、エサルハドンの王碑文における発話と同じように、アッシュルバニパルの王碑文においても発話は情景の詳細な描写以上の役割も担っていたことが予想される。そのため、本発表ではジェラルディの考察を踏まえ、アッシュルバニパルの王碑文における発話を考察する。なお、ジェラルディはエサルハドンの王碑文における発話の用例を内容に踏み込んで逐一詳細に考察したが、アッシュルバニパルの王碑文における発話は約 30 例あるため紙幅がたりない。そこで本発表では内容の詳細な分析よりも、テキストにおける発話の役割そのものの考察に重点を置く。

エマルにおける「世話」契約—4者システム再論—

山田雅道（中央大学）

本発表者は、旧稿「エマルにおける *amīlūtu* と『世話』契約：奴隷、養子、債権者との比較から」『オリエント』55/1 (2012), 2-21 において、シリア・ヒットイト型エマル文書に見られる「世話」契約——主として自身の老後の面倒を頼める息子を持たない男性が、その義務を家族以外の者に託した契約——を扱った。そこで世話者として登場する *amīlūtu*（債務者に一般化可能）、奴隷、通常の養子、債権者の4者に関して、X = 結婚・養子化と Y = 財産相続の2軸によって事例を整理し、それらの標準パターンが平面座標上の四つの象限にそれぞれ対応することを論じた。本発表では、この標準パターン以外の事例をも包括的に理解することを目指して、上記4者の事例を X = 結婚、Y = 財産相続、Z = 養子化の3軸による立体座標において整理した。その結果、4者の振る舞いは、重複することなく八つの象限に対応することが確認された。その8パターンを以下の表に示す。

「世話」契約分類表（* = 標準パターン）

世話者	X	Y	Z
	結婚	相続	養子
通常の養子 A = B *	+	+	+
債権者 C	+	+	-
債務者 (特に <i>amīlūtu</i>) A *	+	-	+
債務者 (特に <i>amīlūtu</i>) B	+	-	-
債権者 B	-	+	+
債権者 A *	-	+	-
奴隷 B	-	-	+
奴隷 A *	-	-	-

債務者と奴隷において顕著なように、振る舞いの「型」を決定する因子は X と Y であり、Z は標準パターンか否かの違いをもたらす副次的な因子にすぎないことが看取される。養子と債権者の場合も、両者、特に債権者 C の特殊性を考慮すると、この基本の変形として十分に理解できよう。この表に示されているごとく、エマルにおける「世話」契約の4者システムは、精緻な立体モデルを構成しているのである。

アッシリアの属国と属州—テル・タバンのヤシン・テペの成果から—

代表者 西山 伸一（中部大学）

企画趣旨

古代メソポタミアの北方の雄、アッシリアに関する研究は21世紀に入り加速的に進展している。このセッションでは、その研究の一翼を担う日本調査団による最新成果を紹介し、それを現在のアッシリア研究の視点から考察する。アッシリア研究では、考古学と楔形文字学を中心とする文献史学が両輪となって研究を推し進める必要がある。この2つの学問分野の協働が実行されているのがここで取り上げる2つの遺跡である。1つは、シリア・アラブ共和国北東部、ハッサケ県にあるテル・タバンの遺跡である。この遺跡は国土館大学調査団により1997年から2010年まで調査が実施された。特に、主に古バビロニア時代から中アッシリア時代の楔形文字史料が多数出土したことで著名である。

もう1つは、イラク共和国北東部、スレイマニヤ県にあるヤシン・テペ遺跡である。2016年より中部大学・筑波大学・国土館大学の研究者を中心とするYasin Tepe Archaeological Project (YAP)によって発掘が開始され、現在も調査が継続している。2017年には新アッシリア時代の「未盗掘」レンガ墓、2018年には新アッシリア時代の楔形文字史料などの新発見が相次いでいる。

2つの遺跡はいずれもアッシリアの領域内にある拠点都市であるが、ヤシンは新アッシリアの属州を代表する都市であった可能性が高く、一方、タバンは中アッシリアの属国であった王国の首都であったことが確認されている。2つの時代、2つの遺跡から見えてくるアッシリアの属国と属州の支配形態について近年の研究成果をまじえた議論をするとともに、「帝国」と「地方支配の構造」という普遍的なテーマについても考察する予定である。

なお、このセッションは、新学術領域研究「古代西アジアにおける都市の景観と機能」（代表：山田重郎；課題番号：18H05445）、基盤研究B「古代メソポタミア北部における歴史時代の物質文化の研究—日本隊の発掘資料を中心に—」（代表：沼本宏俊；課題番号：18H00743）（2018～2022年度）、基盤研究A「文献学・考古学の協働による紀元前18～8世紀上メソポタミアの歴史研究」（代表：山田重郎；課題番号16H01948）との合同企画でもある。

発表1：テル・タバンの出土、中・新アッシリアの遺構と土器変遷（沼本宏俊：国土館大学）

シリア北東部のテル・タバンの発掘調査では、我が国の調査隊としては初の大量楔形文字資料が発見された。粘土板に書かれた行政記録、焼成レンガに刻まれた建築記念碑文など、前13～11世紀（中期アッシリア時代）と前18世紀後半（古バビロニア時代）の文字資料合計約450点が出土した。これまで欧米隊が調査した遺跡からは同時代のこれほど纏まった量の考古・文字資料の発見例はなく、今後、テル・タバンの資料と他地域遺跡と資料を詳細に分析し、比較検討し研究成果を公表することに

なれば、北メソポタミアの未だ不明瞭な前 19～7 世紀の歴史文化の解明に、大きな貢献を果たすことが期待されている。

本発表では、1997～99,2005～10 年の発掘調査で出土した中期・新アッシリア時代の未公表の遺構と遺物に焦点を置き、同時代の地方拠点タベトゥの重要性について述べる。主に中期アッシリアの日乾煉瓦造・焼成煉瓦造公共建物遺構の変遷と特殊遺構や墓等の特色、文字資料や様々な遺物の詳細な出土状況について報告する。

発表 2：テル・タバンの出土アッシュル・ケタ・レシエル 2 世の記念碑文とその歴史的背景（柴田大輔・筑波大学；山田重郎・筑波大学）

本発表ではテル・ブデリとテル・タバンの発見された地方王国マリ国に関する楔形文字文書のうち、前 12 世紀末から前 11 世紀初頭に在位した領主アッシュル・ケタ・レシエル二世の土製円筒碑文を整理し、その歴史的背景について論じる。

碑文からはこの領主の治世に首都の防御施設が再建・拡張されたこと、首都の周辺でサブセンターの城塞化や新しい砦の建造が行われたこと、すなわち領土全体の防衛政策が実施されたことがわかる。また、そうした一連の防衛努力を迫られた事情に関しては、武装遊牧民カルデア人・アラム人が当時マリ国の治安を脅かしていた状況が浮上する。その時期は、碑文に付記された日付からアッシリア王ティグラトピレセル一世（前 1114–1076 年）の治世前半ごろに年代づけられるが、同時代のアッシリア史料からは、武装遊牧民の侵入がジェズィーラ全土に及び、アッシリアが徐々に領土を失っていたことを読み取れる。マリ国の危機はこうした状況の中で起きたローカルな事件の一つと思われる。

発表 3：考古学から見たヤシン・テペ：新アッシリア時代の拠点都市と属州支配（西山伸一・中部大学）

イラク北東部クルド自治区に位置するヤシン・テペは、2016 年より発掘が開始され、新アッシリア帝国の東部辺境の拠点都市としての成果があがっている。50 ヘクタール近い規模を誇るスレイマニヤ県最大級の遺跡は、これまで主にイスラーム時代の痕跡しか報告されてこなかったが、2016 年からの「下の町」の調査で良好な新アッシリア時代（前 8～7 世紀）の遺構、遺物が発見されている。文献史料によれば、ヤシン・テペの位置する地域は帝国の属州（ザムア）として前 9 世紀以降は確実に帝国中心部より支配されてきた。

本発表では、ヤシン・テペの 3 シーズンにわたる調査の最新成果について言及するとともに、帝国の辺境部に位置する都市がどのような構造で、帝国中心部よりどのような支配をうけてきたのかを考察する。また近年新たに発見された楔形文字史料（青銅製ネックレス）についても言及する予定である。

古代エジプト、青色彩文土器の出土場所について

高橋 寿光（東日本国際大学）

古代エジプト、新王国時代第18王朝中期から第20王朝初期にかけて、青色を基調とする「青色彩文土器」が見られる。彩文土器を特徴づける青色は、国外から輸入されたコバルトを原材料とする特殊な青であったことが判明しており、原材料が広く流通しないものであることから、これまで限られた工房で製作された特別な彩文土器と考えられてきた。本発表では、このような特別な青色彩文土器の出土場所の分析から、どのような人々によって利用されているのかを明らかにし、そこから新王国時代の社会の変化に関する考察を行ってみたい。

青色彩文土器の出土場所を見てみると、新王国時代第18王朝後期のアマルナ時代以前では、メンフィス、アマルナ、テーベといった王宮のある中心地に出土が集中している。一方、第18王朝末期のポスト・アマルナ時代以降は、カンティール、メンフィス、グラーブ、アビュドス、テーベ、エレファンティネなど、エジプト各地で青色彩文土器が出土するようになる。発表者はこれまでの研究で、出土場所が生産地をある程度反映していることを明らかにし、そこからポスト・アマルナ時代以降では、王宮のある中心地のみならず、地方都市でも生産が行われるようになったと結論づけた。そして、青色彩文土器がより多くの人々、地方の人々にも利用されるようになった可能性を提示した。

こうした研究を受け、出土場所を更に詳細に分析し、実際にどのような人々が使用しているのかを見てみると、第18王朝後期のアマルナ時代までは、王宮や王の神殿など限られた遺構から出土しており、ここから王や王家の関係者によって使用されていたと考えられる。一方、ポスト・アマルナ時代以降になると、個人の墓からも出土するようになる。しかも礼拝施設や地下埋葬室を伴ういわゆる高官墓のみならず、土坑墓などのような簡易的な墓からも出土するようになる。ここから、王や王家の関係者以外の人々、また比較的社会的地位の低い人々によっても青色彩文土器が利用されるようになったと考えられる。

こうした点から、それまで社会の一部で特別に使用されていた青色彩文土器が、第18王朝末期のポスト・アマルナ時代以降では、ある程度社会の中に行き渡るようになったと考えられる。発表者はこのことから第18王朝末期以降では社会の経済的な格差が減少したと考える。

編み髪の埋納？—アコリス遺跡の出土資料を考える—

和田 浩一郎（國學院大學）

2018–19年シーズンに中エジプト・アコリス遺跡で行われた考古学調査において、新王国時代末から第21王朝に年代づけられる集落の堆積土中から、人間のものと考えられる毛髪が多数出土した。この遺物が注目されるのは、その多くが明らかに切り落とした編み髪の状態だったことにある。

髪に毛に宗教的な意味を持たせる文化は多く、古代エジプトの王朝時代もその例外ではない。例えば神や死者への奉納物と考えられる事例として、アマルナの *Workmen's Village*、ラフーンやアビドスの墓地での出土例が知られる、粘土玉の中に毛髪を入れたものがある。また下ヌビア・ミルギッサのハトホル祠堂では、フリントの小塊やファイアンス製ビーズを伴う髪束の出土が報告されている。ヘロドトスやディオドロスも神への奉納物としての毛髪に言及しており、幅広い時代・地域において髪に毛の奉納が行われていたことが窺われる。

上記の奉納行為では、いずれも子供の髪に毛が奉納物となっているとされている。アコリス遺跡で出土したような編み髪は、古代エジプトでは子供の髪形としてよく見られることが知られており、アコリスの事例も子供の髪に毛である可能性が考えられる。子供の編み髪、特に側頭部に垂らしたもの (*side lock*) は、成人なる通過儀礼などの機会に切り落とされ、神の守護を得るために奉納されたと考えられている。それではアコリス遺跡の事例は、こうした通過儀礼の痕跡として結論付けられるのだろうか。

通過儀礼の編み髪の埋納は、神殿域で行われたと考えられている。しかしアコリス遺跡での出土位置は、神殿域から最も離れた集落の南端部である。また編み髪は土坑に埋納されていたわけではなく、木製の紡錘車や織機の錘、亜麻糸の未成品などを豊富に包含する堆積層から面的に出土した。この堆積層は、付近にあったと想定される機織り工房の廃棄物によって形成されたと考えられている。つまりゴミに混じっていたことになる。ただしこの堆積層はその形成過程において、南の墓域側からの流れ込みを推測させる堆積状況にもあった。そこで本発表では、葬儀における編み髪の役割という方向で考察を進めてみることにしたい。

中央アナトリアにおける前期青銅器時代土器の変遷とその年代
—キュルテペ遺跡出土資料を中心に—

山口 雄治（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）

紺谷 亮一（ノートルダム清心女子大学）

上杉 彰紀（関西大学）

下釜 和也（古代オリエント博物館）

千本 真生（筑波大学）

Fikri Kulakoğlu（アンカラ大学）

中央アナトリアにおける前期青銅器時代は、遺跡の調査年代の古さや良好な層位的資料の不足から、東西アナトリアと比較して時期区分や年代について未解明な部分が多い。したがって、当該時期における中央アナトリアの文化的様相はもとより、この時期に西アジア各地で進行する都市形成との関連についても議論することが困難となっている。

そこで本発表では、中央アナトリアにおける前期青銅器時代土器の変遷とその年代について明らかにすることで、上記問題の克服を目指す。具体的には、2015年度より発表者らが調査を行っているキュルテペ遺跡北トレンチの発掘調査成果について報告する。

当該調査地点では、(1)I～XV層まで確認でき、I～XII層の年代は前3千年紀初頭から末でありおよそ間断ないこと、(2)従って出土土器は前期青銅器時代I～III期の様相を連続的に示していること、(3)IX層より上層ではシリアン・ボトルを含むロクロ製整形土器が共伴するようになること、などが明らかとなった(Kulakoğlu et al. in press, 上杉ほか2016、下釜ほか2017)。これらの土器群についてさらに詳細に分析し、中央アナトリア周辺地域における他遺跡出土資料と比較することで並行関係等についての予察を試みる。

【参考文献】

Kulakoğlu, F., Kontani, R., Uesugi, A., Yamaguchi, Y., Shimogama, K., Semmoto, M. (in press) Preliminary Report of Excavations in the northern sector of Kültepe 2015-2017, *Subartu*.

下釜和也・山口雄治・紺谷亮一・上杉彰紀・山口莉歩 2017「中央アナトリア前期青銅器時代における「非在地系土器」—キュルテペ遺跡出土土器の評価をめぐって—」『西アジア考古学会第22回総会・大会要旨集』西アジア考古学会 pp.73-76.

上杉彰紀・紺谷亮一・須藤寛史・山口雄治・Fikri Kulakoğlu 2016「銅石器時代～前期青銅器時代・アナトリア中央部における土器の様相」『西アジア考古学会第21回総会・大会要旨集』西アジア考古学会 pp.3-4.

ヒッタイト王の神々に対する敬意の表し方

山本 孟（日本学術振興会・同志社大学）

本発表では、紀元前2千年紀後半のアナトリア中央を中心に成立したヒッタイト王国における儀礼行為について考察する。ヒッタイト王国の都ハットゥシャの遺跡から出土した楔形文字粘土板文書の大半を占める宗教に関連する文書であるが、その内、祭儀文書や儀礼文書にみられる儀礼行為、特に王が神々に敬意を表すための行為に注目する。

ヒッタイトの儀礼では、神に向き合う際の王の所作や、王に対する臣下の礼として、「頭を下げる」や「ひざまづく」などの行為に言及されることがある。これらの行為を表すヒッタイト語には、「頭を下げる」行為を意味する *ḥenk-* と *arnuwai-* という動詞や、「ひざまづく」ことと近い行為であると思われる *ḥaliya-* や *ginuššariya-* などの動詞がある。ただし、いくつかの辞書ではそれぞれの動詞の訳語に重なるものもあり、その差が不明確な部分がある。また、「頭を下げる」行為はいずれもアッカドグラムでは *ŠUKĒNU* と表記されるが、これら二つの動詞は同一の行為を表しているのか、そして膝にかかわる動作であるとされる *ḥaliya-* や *ginuššariya-* という二つの動詞についてもそれぞれの行為に違いはないのかという点についても明らかではない。

本発表は、上に挙げた動詞が表している動作を確認することによって、王から神々へ、あるいは臣下から王への敬意を表すために行われる行為とそれぞれの意義を理解することを目的とする。各動詞が表している所作について、主に祭儀・儀礼文書における用例を確認し、それぞれが具体的にどのような動作を指しており、どのような場面で行われるものかを整理することで、それぞれの意義を明らかにする。

紀元前1200年前後のキプロス島に於ける土器生産の新たな盛行とその背景

土居 通正 (本学会会員)

2010年代に入って、キプロス島では所謂「危機の時代」(“crisis years”)とされる後期青銅器時代終末期に関わる重要な発掘が行われ、今日も続行中である。又、それらにより重要な知見もたらされている一方、これまでにキプロス島の各地で出土した当時の土器資料を集成した網羅的な研究も最近公刊され、この分野での研究は現在大きな進展を見せつつある。

紀元前1200年頃、もしくは前1190年頃にギリシア本土ではミケーネ、ティリュンスを始めとする諸宮殿の崩壊があり、宮殿が管理していた経済は終焉を迎える。そうしたなかで、ギリシア本土とキプロス島を含めた東地中海地域との交易は途絶えたと考えられているが、この間の様相を時期を追って追求するため、土器の編年に多くの努力が重ねられ、ギリシア本土については綿密な発掘の成果として編年の細分化が進んだ。しかし一世代を切るような年代幅の時期が想定されるなか、各時期の実年代上の位置付けが流動的であることは研究者が共通に認めているところである。

ギリシア本土の編年では、従来、前1190年をもって Late Helladic (LH) IIIC 期の開始とし、キプロス島では、ラルナカ近郊のハラ・スルタン・テケ (Hala Sultan Tekke) の発掘者、オーストレム (Åström, P.) が Late Cypriot (LC) IIIA1 期の開始をこれに同期させ、その終了については前1150年としている。2010年以降彼に代わってフィッシャー (Fischer, P.) が発掘を再開し、特大の大鉢形のクラテールで、図像的にも興味深い装飾を持つものが相次いで出土した。発掘者によれば、これらは出土状況から層位的に明らかに LC IIIA1 期以前、遅くても前1200年よりそれほど下らないとされた。これらが在地のものであることは疑いなく、その精巧な絵付けから、ほぼ同時期に盛行していた Rude/Pastoral Style とよばれる在地の動物文付きクラテールとは区別されるべきものである。この種のクラテールにはその創始期に位置付けられる資料についてクレタ島に由来する図像が指摘出来るが、上述のハラ・スルタン・テケ出土クラテールの図像にも同様な見方が出来る。

このように、紀元前1200年前後する頃、キプロス島の土器製作には新しい動きが観察できるが、クレタ島の影響という点では、これまでも同じハラ・スルタン・テケから出土した大鉢形のクラテールについて指摘されている。この土器はクレタ島の宗教的シンボルである「聖別の角」を含む多様な文様が器面を覆って精緻に描かれたもので、ギリシア本土で LH IIIC Middle 期に盛行する土器様式を憶わせるが、オーストレムはこのクラテールの年代を LH IIIC Middle 期に平行する LC IIIA2 期とした。両時期共、前1150年頃に始まるとされるが、フィッシャーは、ハラ・スルタン・テケは前1150年頃に放棄されたとしており、従ってこのクラテールの年代もそれ以前、すなわち LC IIIA1 期となる。この見解に従えば、近年発見されたクラテールは、続く前12世紀前半にキプロス島で製作された優秀な土器の先駆けとして位置付けられるものと考えられる。

サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の立地条件と構造
—初期イスラーム時代の港まちの分布調査から—

長谷川 奏（早稲田大学総合研究機構）

徳永 里砂（アラブ・イスラーム学院、金沢大学国際資源学研究中心）

西本 真一（日本工業大学建築学部）

恵多谷 雅弘（東海大学情報技術センター）

本発表では、サウジアラビア（以下サウジと略記する）・日本の合同調査隊による、紅海沿岸の港まちハウラー遺跡のサーベイ（後背地の碑文調査を含む）の最新の成果を扱う。紅海沿岸は、ローマ時代には『エリュトラ海案内記』で知られる海上交易の場であり、イスラーム時代には交易港としての機能に加え、マッカ巡礼路の通過地点となった。本発表ではこのうち、地表面観察で確認される初期イスラーム時代のトピックに限定して報じる。

ハウラー遺跡は、ウムルジュの10kmほど北に位置する。南北に2km、東西に0.5～1.0km程度の広がりを持ち、サウジの国家遺産観光庁によって保護されている。1980年代に在地の考古学研究者によって部分的な試掘調査が行われたが、基本的には未調査の遺跡である。上記の合同調査隊は、2017～19年に遺構・遺物の分布調査を行い、併せて微地形観察と空間情報分析（主にWorldView-2のDSMデータ分析）を進めたところ、遺跡は港域と集落域に分化できる可能性が得られ、砂漠内を走る天水の流路が遺跡の立地条件に深く関わる点が推測された。紅海対岸のエジプト側の地溝帯沿いの港湾都市の立地条件については長い学史があるが、サウジ側でこの点を科学的に実証する手法は、今後の紅海沿岸の港湾都市分析に極めて有用に活用されると思われるので、本発表の柱の一つとして報じたい。

第2点目は、遺跡構造に関する成果報告である。集落域は東西300m、南北150mほどの規模を測るが、ここには家屋の集中区があったと思われる。当該区では、1980年代の試掘調査でクルアーンの一節が記された堂々とした石製リンテルが取り上げられており、モスクの存在も推測される。集落域に分布する遺物は、素焼きの土器、陶器（緑釉、黄釉、白濁釉で、イラクやシリアなどの影響下に作られたものが中心）、石製容器、ガラス器等の総体は、概ね9～12世紀頃に位置づけられた。さらに、ウムルジュ湾全体を見渡せる見通しの良い高台からは、ランドマークともなる象徴的な建造物が発見された。この遺構は、厚い壁厚（約1.5m）を有するほぼ方形の珊瑚造の建造物（約35m四方）であり、その防衛的性格は明らかである。ムカッダシー（10世紀）の記述には、「砦と集落、市場」の存在がみられるために、発掘の前段階において、歴史文献との接点となる大きな指標が得られた成果を強調したい。

バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト第5次調査の報告

安倍雅史（東京文化財研究所）

上杉彰紀（金沢大学）

西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）

後藤健（東京国立博物館）

ディルムンは、メソポタミアの文献資料に登場する周辺国の1つであり、前2千年紀前半（前2000年～前1700年）に、メソポタミアとマガン、メルッハを結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄したことが知られている。

メソポタミアには、ディルムンを経由し、銅や砂金、錫、象牙、カーネリアン、ラピスラズリ、黒檀、真珠など大量の物資が運びこまれていた。いわば物流の面からメソポタミア文明を支えていたのが、ディルムンであった。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーン島が、このディルムンに比定されている。筆者たちは、2014年度より、「バハレーン・ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト」を実施している。本プロジェクトの目的は、ディルムンの起源を考古学的に解明することである。

ワーディー・アッ=サイルは、バハレーン島内陸部を南から北へと流れる全長4kmほどの枯れ川であり、この両岸に一千基程の古墳がかつて分布していた。このワーディー・アッ=サイル古墳群は、バハレーン島最古の古墳群であり、ディルムンの形成期（前2250年～前2050年）に年代付けられている。

形成期は、それまでほぼ無人の土地であったバハレーン島に大規模な植民があり、古墳の築造が開始された時期である。続く文明期（前2050～前1700年）には、海上交易の発展に伴い社会の複雑化が急速に進行し、巨大な王墓や神殿また城壁都市が建設されている。

バハレーン島最古の古墳群であるワーディー・ア=サイル古墳群は、ディルムンの起源を研究する上で最適の古墳群である。本発表では、2019年の1月と2月に実施したワーディー・アッ=サイル古墳群の第5次調査の成果を報告したい。

ローマ・ビザンツ時代パレスチナにおける教会堂建築の変遷
—ユダヤ・サマリア地域を中心に—

藤澤 綾乃（慶應義塾大学）

イスラエル／パレスチナ地域（以下、パレスチナ）は、旧約・新約聖書時代の伝承が綿々と受け継がれる一方で、ギリシア、ローマ帝国、ササン朝ペルシア、イスラーム勢力など時代を代表する覇者によって抑圧・支配されてきた。パレスチナのキリスト教化もまたこれらの歴史的事象に左右されつつ、広がっていったと考えられる。本研究は、ローマ・ビザンツ時代のパレスチナにおけるキリスト教化の経緯とその在り方を教会堂遺構の建築変遷から探り出すことが目的である。

一般に、パレスチナではコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認によって教会堂建設が盛んになったと考えられている。また、それに伴い巡礼者の往来も活発になり、5世紀後半には大多数がキリスト教徒になったとされる（Avi-Yonah 1966; Hunt 1982; Tsafir 1993; Stemberger 2000; Magness 2012; Taylor 2019 他）。しかし最近では、キリスト教は5世紀後半まで都市部に限定された宗教であったという見方もなされている。こうした見解は近年の考古学的調査の成果に基づくものであり、とりわけ都市郊外や農村部においては、キリスト教徒の増加云々以前にそれを下支えできほどの人口に達していなかったと考えられている。（Bar 2003; Magen 2012 他）。

このように、パレスチナでキリスト教化がいつ頃から活発になったのかについての見解は二極化を辿っているが、そもそもこうした見解の違いの根底には、各宗教遺構の年代決定やその詳細が考古学的に曖昧なまま議論されているという課題が残されている。また、すでに出土遺物や銘文、舗床モザイクの図像の特異性によって、5世紀後半から6世紀に建設された教会堂の建築構造については議論されているが、4世紀から5世紀前半に建てられたとされる教会堂については、その年代決定が文献史料に頼られることも多く、考古学的検討が十分に為されていないことも指摘される。とりわけ、ユダヤ・サマリア地域は聖書の言及と密接に関わりがあり、現在までに300基以上のキリスト教関連遺構が確認されているが、それらの建築変遷に関する研究はほとんど行われていない。その要因の一つとして、当該地域の大半が現パレスチナ自治区に位置し、考古学的情報が周知されていないことも挙げられる。本発表では、当該地域において4世紀から5世紀前半に建設されたとされる教会堂遺構に着目し、その年代決定方法を再吟味しつつ、建物の地理的立地、平面規模、型式、建材、内部構造の比較検討を行う。

北シリアのビザンツ時代の墓の副葬品—ガラス玉に焦点をあてて—

津村 眞輝子 (古代オリエント博物館)

本発表では、北シリア、ユーフラテス川中流域の5～7世紀の墓の副葬品について、ビーズ(孔のあいた玉)、なかでもガラス玉に焦点をあてて報告する。対象は古代オリエント博物館シリア考古学調査団(団長:江上波夫)が1970年代に発掘調査した資料である。河岸段丘の石灰岩を穿った地下式横穴墓から出土したものであるが、概報や短報が出たのみで、未発表、未整理の資料も多い。幸い、本調査はユーフラテス川中流域のダム建設に伴う緊急発掘であったため、出土資料の大部分がシリアから古代オリエント博物館に分与されている。報告者が現在、資料・遺構の再整理・再検討を進めており、一昨年の本大会では、出土したランプから見た埋葬施設の特徴を報告した。今回は、その後実施した科学分析や再検討した成果を報告するなかで、特にガラス玉について検討する。以下はその概略である。

1. 遺跡:シリア、ユーフラテス川中流域の河岸段丘と水没した氾濫原の境に点在する地山の石灰岩を穿った地下式横穴墓である。墓の形式および出土資料からローマ・ビザンツ時代の墓と推定できる。盗掘をうけた墓が多いなか、未盗掘と推定できるルメイラ E-2 号墓からは、ランプ 59 点、ガラス容器、把手付壺や浅鉢などの土器類のほか、被葬者が身につけていたと考えられるビーズや指輪、腕輪などの装身具が出土した。ランプの煤部分の放射性炭素年代測定では、421 年～537 年(95.4%)という結果が出た。天井高 1.9 m の正方形の墓室(2.5×2.5 m)に、正面および左右の3壁面に半円アーチ状の開口部を持つ棺床が掘られている。

2. ビーズ:上記のルメイラ E-2 号墓では、おそらく各一人埋葬されたと思われる各棺からビーズが10点以上出土している。素材はガラスが最も多く、青や緑色の単色ガラス玉のほか、3色以上のガラスを用いた所謂トンボ玉が各1点含まれていることが注目される。奈良文化財研究所との共同研究として基礎ガラスおよび着色剤の蛍光X線分析を実施した結果、異なる制作地のものが混在していることやユーラシア大陸および日本からの出土資料との類似性も指摘できる。ガラス玉以外にアメジストや赤メノウの貴石も検出されており、アラビア半島やインドス方面との関連性も指摘されている。

以上の資料の調査・分析結果を報告した後、ユーフラテス川沿いのキリスト教徒の墓から類似の資料が出土することなどを俯瞰しながら、ビーズの制作技法、搬入経路だけでなく、美しい色の玉が副葬された意味についても考察したい。

高句麗からもたらされた三本足のカラスの紋章の源流と文化の伝播

下山 繁昭（さいたま市文化財保護課）

鳥が靈魂を運び先導すると考えるのは古くはエジプトにあるが鳥は隼である。つたわる過程で隼から鳥に変わって行った。『山海経』「海内北経」の編(中国の戦国時代から漢代の作)に西王母は几に梯子て勝・杖を戴く其の南に三青鳥有り、中国では三羽の青い鳥の話が伝わるが、高句麗では鳥に変わって行った。発信地は隼であったのが鳥に変わって行ったが鳥が靈魂を運ぶのは変わらず、太陽に入り込み黒点と考え、太陽信仰の元となった。信仰以外に高句麗文化が伝わったのを項目別に、相撲文化、流鏑馬、風俗文化のみずら、古墳壁画について紹介をしたい。先行研究に全浩天『古代壁画が語る日朝交流』がある。

① 撲文化、源流の根拠となる考古学的資料は安岳三号墳の壁画である。高句麗最大の壁画古墳で四世紀中頃に築かれた。裸で褌をしめ手を振り上げ打ち合い足は半分膝まで挙げている。日本では張り手と言われる技である。角抵塚を観察すると、髻を結びショートパンツの上に褌で裸である。素手で組み合っている。土俵はない。古代日本と共通の文化を共有していた証拠である。考古学的資料では埼玉県行田市酒巻14号墳である。褌に衣服を着て耳飾り、首飾りなど装飾品をつけ葬送する祭祀の力士埴輪である。六世紀後半の時期である。他にも和歌山県の岩橋千塚古墳群の中にある井辺八幡山古墳である。褌を締めて両手を前に突出し相撲をとる姿勢のものが発掘された。時期は六世紀初の築造である。

②流鏑馬、徳興里壁画古墳玄室の西側壁画右側上段に「馬射戯図」日本で言う流鏑馬が描かれている。的は棒を立て、先に四角の板をはさみ馬上から射落とす。矢は鏑矢で同じである。違うのは、振り返りざまに弓を引くことはしないが風土記の逸文には後ろ向きに騎射することが記録されており高句麗の技術が入って来たことが分る。③みずら、徳興里壁画古墳の前室から玄室に通ずる通路の東側の壁面に描かれている貴人が乗る轎車の前二人の男子と後ろで曲柄傘を捧げた従者は髪型のみずらである。日本では法隆寺の「御物聖徳太子画像」の左右の二王子の髪型のみずらである。考古学的資料では埼玉県行田市瓦塚古墳出土の人物埴輪「朝鮮琴を弾く男子」のみずらが見られる。6世紀中頃である。

④古墳壁画、高松塚壁画古墳に描かれた女子群像は水山里壁画夫人群像と類似している。高句麗独特のロングスカートすなわち、縞模様のスカートをはいている。キトラ古墳の天文図のものと高句麗の石刻天文図であるが高句麗滅亡の時紛失した。この事実は李成桂が朝鮮建国三年後に「天象列次分野之図」を製作した。銘文に高句麗石刻天文図によって製作された事情を記録していた。平壤落城するとき石刻天文図の写しが最低二枚あり一枚が飛鳥に渡りもう一枚がソウルへ。高度な天文の知識が当時の倭国と半島に伝播した。

ガンダーラの仏教彫刻におけるディオニューソス神図像の受容の特徴

田辺 理（日本学術振興会 PD 特別研究員（創価大学国際仏教学高等研究所））

ガンダーラの仏教彫刻には、ギリシア・ローマの神話に登場する酒神、ディオニューソス神と眷属に関連した図像が見られる。例えば、男女の飲酒饗宴、性愛、奏楽、または葡萄酒製造などである。これらの図像は、一般的にギリシア・ローマ美術の影響を受けて制作されたと考えられているが、何故、このような世俗的、異教的な図像が、悟りを目的とする仏教に受容されたのか、理由が解明されていない。本発表では 最初に、上述のガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属に関連する図像を概観し、ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神に関連する図像が男性の飲酒饗宴、性愛、奏楽、葡萄酒製造などの図像にテーマが限定されていることを示す。つぎに、ギリシア・ローマ美術に見られるディオニューソス神と眷属の図像を概観することによって、ギリシア・ローマ美術における同図像のテーマが、殆ど神話に関連するものであることを明らかにする。その後、ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属に関連する図像とギリシア・ローマ美術に見られる同図像を比較考察することによって、ガンダーラにおいて採用されたテーマが、ギリシア・ローマ美術に多数描写されているディオニューソス神と眷属の図像と比べて部分的、限定的であり偏向している事実を明らかにする。次に、何故、ガンダーラの仏教徒が、そのような図像だけを限定的に受容したのか、その理由を仏典に記述された部派仏教の来世観から明らかにする。

エーラーン帝国の宗教—マズダー教、ズルヴァーン主義、ゾロアスター教—

青木健（静岡文化芸術大学）

本発表のテーマは、エーラーン帝国（224年～651年。通常、サーサーン朝ペルシア帝国と呼ばれる）の宗教の変遷である。3～4世紀の段階では、皇帝が造営した中世ペルシア語碑文に「マズダー崇拜教」という術語が頻出するが、その内容は明らかではない。特に、ザラスシュトラ・スピターマ伝説の欠落は、この宗教を「ゾロアスター教」と呼ぶのを躊躇させる。

而して、5世紀半ばの大宰相ミフル・ナルセフ・スーレーンは、アルメニア王国の民に対して「マズダー教」を強かに推奨している。それを明らかにしているのが、439年にアルメニア人キリスト教徒に対して「マズダー教」への改宗を薦めた回勅『始原から終末に至るまでの世界の本质と人間の霊魂に関する解説』である。それによると、439年段階のマズダー教教義は、我々が現在ゾロアスター教の正統教義として認識している二元論ではない。この回勅の中では、時間の神ズルヴァーンの下で、善神オフルマズド（アフラ・マズダー）と悪神アフレマン（アンラ・マンユ）が闘争を繰り広げる「ズルヴァーン主義」が、中核教義をなしている。そして、時代を同じくするアルメニア語訳では、相変わらずザラスシュトラ・スピターマ伝説が欠落している。

即ち、ここで表明されている教義は、「ゾロアスター教」ではない。それは、エーラーン帝国初期以来継続してきた「マズダー教」の最終形態である。発表者は、「マズダー教」が最終的に教義を整えたこの教えを、「マズダー教ズルヴァーン主義」と定義したいと思う。ミフル・ナルセフ自身もこれを信仰していたらしいことは、前出の彼の長男の名前「ズルヴァーン・ダード（＝ズルヴァーン神に創造された者）」から推測できる。

だが、皇帝ヤザドギルド2世の即位以降、事態は一転して、全く新しいエーラーン帝国の国体イデオロギーが明徴になった。ヤザドギルド2世の即位（438年）の1年後（439年）に宣布されたミフル・ナルセフの回勅は、アルダフシール2世以来胎動していた帝国イデオロギーの混乱期の最終段階を象徴する仇花に過ぎない。

その国体明徴の証拠として、ヤザドギルド2世は、自ら発行したコインに、中世ペルシア語で「マズダー崇拜の神たるカイ（マーズデースン・バイ・カイ）」と刻んでいる。このうち、「マズダー崇拜の神」の部分については、前代の皇帝から変化はないが、決定的に重要なのは、後段の「カイ」の部分である。これは、ザラスシュトラ・スピターマを輔翼して「ゾロアスター教」の普及に尽力したカウィ・ウィーシュタースパ大王の称号「カウィ」の中世ペルシア語形に当たる。つまり、帝国開闢以来初めて、疑う余地もなく『アヴェスター』的な文言が、エーラーン帝国の公的文書に出現したのである。発表者としては、この段階で、エーラーン帝国は「ゾロアスター教」を国教に採用したのではないかと考えている。

ヘブライ語聖書における「埋葬地」としての水溜めの性質

新井 雅貴（同志社大学神学研究科）

ヘブライ語聖書全体で 64 回言及されるבורという名詞は、出エジプト記に含まれる法的な文書および歴代誌内の歴史記述から、生活用水としての雨水を確保するための岩穴、すなわち水溜めであることが示唆される。しかし同時に、詩篇や預言書を中心とした詩文においては、この語はשאול（冥界）の同義語として用いられ、死者の居場所を意味する。本発表は、ヘブライ語聖書におけるבורの用法を分析したうえで考古学資料と対照し、水溜めの穴としての構造を把握するとともに、水溜めであるבורが「埋葬地」として用いられる理由、およびそのような水溜めの用法が死者の埋葬という点においてもつ意味を、墓との比較によって明らかにすることを目的とする。

בורが水溜めとして用いられる記述からは、この穴が飲料や耕作のために雨水を溜めることを目的として人工的に岩盤に掘られたものであることが確認できる。この特徴は発掘で報告される一般的な水溜めの構造とも一致する。また、雨を水源とするため、町の公共物である井戸とは異なり、地下水のある地域に限らず作られ、個人や王に所有された。一方、בורに死者が入れられる場面では、その死者は殺されており、殺害した人物の手でבורに投げ込まれている。この描写は明らかに死者に対して敬意を払うものではない。それに対して、墓への埋葬の場面では追悼を意味する行為を伴って描写される。この儀礼の有無が、水溜めと墓における「埋葬」の最大の違いであり、בורへの「埋葬」は死者への侮辱であるといえる。

正式な埋葬地である墓には、そこに埋葬されている死者の名前を記録し、追悼儀礼によって死者と生者の交流の場になるという役割がある。そのような機能は水溜めであるבורには無い。בורに入れられた死者が地上世界との交流をもたない存在であるというヘブライ語聖書の主張は、בורが墓ではないことに起因している。水溜めへの「埋葬」は死体の遺棄であり、この行為には死者を侮辱する意図がある。このことから、「埋葬地」としての水溜めの重要性は、正式な埋葬地ではない点にあると結論付けられる。

スーダン国立博物館所蔵鉄製品の考古学的・文化財学的意義について

関広 尚世（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）

スーダン国立博物館には、1960年代のヌビア遺跡群救済キャンペーン等で出土した鉄製品が所蔵されている。これらの資料には、古代スーダンの物資文化を明らかにするための重要な手掛かりが多く含まれているにもかかわらず、収蔵庫に眠ったまま、活用されていないのが現状である。そして、研究者の記憶からもその存在が薄れつつある。本研究の始発点は、この現状に疑問を抱いた点にある。

古代スーダンが、鉄や製鉄と密接に関係する文化であることが明らかになってから久しい。また近年では、ロンドン大学カタール分校のJ. ハンプリス(Humphris)隊長のもとメロエの製鉄技術復元が試みられている。2000年初頭に一時中断していた古代スーダンの鉄研究に「再び火が入った」のであるが、製鉄技術の全貌を明らかにするには多くの年月を要するとみられる。そしてその中の課題の一つが、製品自体の研究である。

同博物館での資料調査の結果、下ヌビア出土の鉄製足輪には2形式が認められ、メロエ地域の出土の鉄製腕輪には3形式が認められた。また、腕輪・足輪以外の調査からも多くの知見を得ることができた。

資料の形式学的な検討成果はポスター発表で行うが、本発表では、その成果をもとに所蔵鉄製品の考古学的意義を明らかにする。さらにそれに基づき、資料調査の中で明らかとなった博物館資料の登録や収蔵についての現状や課題の検討から、その文化財学的意義も提示する。

シリア語 Differential Object Marking の地域差について

原 将吾 (筑波大学)

シリア語には Differential Object Marking (DOM) と呼ばれる、他動詞の直接目的語がある場合には標識を伴い、ある場合には無標で現れるという現象が見られる。この現象は広く世界の言語に見られるものであるが (cf. Sinnemäki 2014)、シリア語の場合は動詞に付加されるものと名詞句に付加されるものの2種類の標識がこれに関与するという点が特徴的である。

本発表ではこの現象について既発表論文 (原 (2018)) で提案した仮説がシリア語の東西両方言に成立するものであるかどうかを検証する。検証に際しては、資料から直接目的語として名詞句を伴うものを収集し、その名詞句の定性・有生性をチェックし集計する、という方法を取った。その結果、原 (2018) の仮説については、

- 1) 「定性と有生性の双方が標識の出現に関与する」が東西両方言で確認できる
- 2) 「動詞付与タイプと名詞付与タイプの2つの標識は定以上の目的語名詞句に限って共起するという観察は西方言で確認できる

ということが指摘できた。他方で

A) 動詞に付加する標識は東西方言で出現の差が見られないが、名詞付加タイプの標識は西方言でより現れにくい

B) 東方言では不定特定の目的語名詞句に対しても2つの標識が共起するという方言差のようなものも観察された。

ただし両方言ともに利用した資料が少ないため、現段階ではまだその資料の特性に過ぎない可能性も否定できない。また方言差の可能性があるA,Bの2点についても、そのことがどの程度意味を持つものであるかについて十分なデータがあるとは言えない。今回の調査を予備調査として、今後は複数の資料を用いてデータを拡大する必要がある。

参考文献

原将吾 (2018) 「シリア語における目的語標示の使い分けと有生性・定性」『オリエント』61(1): 13-26.

Sinnemäki, Kaius. (2014) A Typological Perspective on Differential Object Marking. *Linguistics* 52 (2): 281-313.

カローシュティー文字の形態変化に関わる考古学的検討
—西北インド出土の碑銘資料を中心に—

内記 理 (京都大学)

紀元前3世紀頃から紀元後3世紀頃にかけて、西北インド（現在のパキスタンのペシャーワル盆地とその周辺地域）ではガンダーラ語が用いられ、それを表記するためにカローシュティー文字が使われた。貨幣銘における同文字の発見と解読以来、同文字によって書かれた碑銘資料や文書資料の発見が続き、ガンダーラ語やカローシュティー文字の研究がおこなわれてきた。ごく近年においても、新たに市場に出回るようになった文書資料の整理と読解が進められ、そこから同地の仏教を復元しようとする試みが続けられている。

カローシュティー文字における研究のうち、文字の形態に着目する議論は、古くから存在した (Majumdar 1937: 2)。字形は時代が下るに従って変容した、とする指摘であり、特に「s」音を表す字が変化の最も分かりやすい指標文字としてしばしば取り上げられた。しかしその後、相対的に新しい時期の碑銘資料の中に、「s」字の古いとされる字形と新しいとされる字形が混在することが明らかになり、字形に頼った議論の難しさが浮き彫りになった (Das Gupta 1958: 102; 146)。現在は、「s」字の形態は時期判断の指標となりうるが、そのみで判断をしない方が賢明である、とする結論に落ち着いている (Salomon 1998: 55)。

このように、これまでは字形の有無に着目したカローシュティー文字資料の制作時期の検討がおこなわれてきた。「s」字の形態だけでなく他の文字の形態も考え合わせて時期を判断した方が良いとする R. サロモンの意見は卓見である。しかし一方で、他の文字においても複数の形態が同じ資料上に現れた場合に、時期判断をするために用いるべき文字がなくなってしまうという問題がある。また、もう1つの問題点は、これまでの研究では時期の区分を、インド・スキタイやクシャーンなど王朝名を用いて曖昧におこなってきたことである。支配王朝の交代で字形が刷新されたとは考えがたく、字形の変化がどのような時期に起こったかを検討する必要がある。

これらの問題点を解決するために今回発表者が考えたのは、文字の有無ではなく割合に着目した資料の分析の方法である。分類された字形の中で、1点の資料上において最も大きな割合を占めるのがどの字形かを複数の文字を使って分析することにより、資料の制作時期についてより精緻な判断ができるのではないかと考えた。そこで今回は、西北インドで出土したカローシュティー碑銘資料のうち、王名や紀年銘によって大まかな制作時期の判明している資料を取り上げ、字形の変化についての分析をおこなう。

古代ギリシア・ローマ世界における身振り図像とその形成、変遷、差異のメカニズム—「両手を上げる」身振りを中心に—

代表者 田中 咲子（新潟大学）

企画趣旨

初期キリスト教における祈りは、しばしば今日でいう降参のポーズのような、両手を前方に掲げる身振りで表される（オランス）。このオランス型の祈りのポーズの起源として、古代地中海世界の命乞いのポーズが指摘されることがある。しかし実際には、古代世界でこの身振りは命乞いにとどまらず、実に多様な意味を担っていた。本セッションでは、古代地中海世界の図像表現において当該身振りに付与された様々な意味を概観するとともに、同一の身振りがそれぞれの時代や地域によって意味を変化させた背景を社会史的、芸術学的に検討する。

情報伝達手段として言語を用いない造形表現では、図像中の人物の身振りはその図像の意味を示唆する役割を持つ。つまり造形言語として機能する。それゆえ身振りは図像解釈の重要な手掛かりとなるが、他方、身振りはしばしば多義的であり曖昧である。それゆえ美術史における身振り図像の研究は、結局はアポリアに陥るのが相場であるという見方さえある。本セッションで扱う「両手を上げる」身振りに実にも多義的であり、図像解釈の手掛かりとなるべき身振りであるはずが、本身振りの場合は、逆に文脈から身振りの意味を推測せざるを得ない。本身振りは、身振り解釈の限界を体現するものといえる。

しかし実際に社会で用いられた身振りではなく、造形的に表現された身振り図像の研究において留意すべきは、身振り図像には様々な社会的フィルターがかかっており、必ずしも同時代の実践をそのまま反映したものとは限らないという事実である。図像として表現するにあたっては、例えば、その身振りをとる人物の社会的地位の示唆や当時の社会規範の視覚化が意図される。つまり図像表現における身振りは、当時の身分概念や社会規範、価値概念が表象される場である。

これまでの調査から、古代ギリシア・ローマ世界における「両手を上げる」身振りには、主なものとして祈願、哀悼、嘆願、驚きといった意味が確認できた。時期や地域によって、同一の身振りに付与される意味は異なることも確認された。同じ地域であっても、時期が数十年ずれるだけでこの身振りの意味が変化した事例も認められる。この変化の背景として想定されるのは、社会の心性の変化、もしくは芸術観の変化である。そこで本セッションでは、いくつかの具体的な事例を取り上げ、「両手を上げる」身振りが担うそれぞれの意味が形成された背景を考察する。それを通じて、それぞれの社会の倫理観や宗教的特性等、社会の価値概念にアプローチする。

セッションでは、発表で扱いきれないメソポタミアやエジプトなどの事例に関するフロアからの指摘を交えて、幅広い議論を喚起したい。

尚、本セッションは科学研究費助成事業「新学術領域研究：トランスカルチャー状況下における

顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現」における公募研究「身振り概念の変化のメカニズムに関する美術史的考察—古代ギリシア・ローマ美術から」(代表: 田中咲子) の成果の一部である。

発表 1: 田中 咲子 (新潟大学) エーゲ時代からヘレニズム時代における「両手を上げる」身振りの編年と意味—哀悼と嘆願を中心に—

本発表では、まずエーゲ時代からヘレニズム時代にかけてのギリシア美術にみられる当該身振りに現れた意味を編年的に整理する。その上で、哀悼ならびに嘆願(命乞い)としての身振りに着目し、当該身振りの意味としてそれぞれが現れた背景を検討する。哀悼および嘆願の意味での当該身振りは、それぞれ特定の時期に現れ、各時期において主流の意味となった。他方、哀悼も嘆願も、時代が変わると別の身振りが用いられるという現象が認められる。そこで本発表では、それぞれの意味を表す身振りが変化した背景を相関的に考察する。

発表 2: 小堀 馨子 (帝京科学大学) 帝政期ローマにおける「両手を上げる」身振りの意味の変遷—哀悼・貞節から女神の顕現へ—

本報告では、帝政期ローマ時代の美術に見られる当該の身振りに表現された意味の変遷を整理する。ヘレニズム時代の哀悼の身振りが、帝室女性に相応しい身振りとされ、同じ帝室女性の身振りの中でも、時代の変化を背景にした意味の変遷が生じていることを、諸作例を通じて明らかにする。

発表 3: 坂田 道生 (千葉商科大学) 《ユリウス・テレンティウスのフレスコ》に関する—考察—身振り表現、図像伝統、神殿と軍隊との関係から—

本報告では、ドゥラ・エウロポス遺跡から見つかったパルミラの神々の神殿壁面に描かれた《ユリウス・テレンティウスのフレスコ》を考察対象とする。軍人による犠牲式図像における身振り表現、近年解明されつつある軍事拠点としての都市の性格、都市における神殿と軍隊との関係などの視点から検討を行い、本作の特徴と意義について考えてみたい。

初期イスラーム時代ヒジャーズ地方のグラフィティにみられる文面の変遷

徳永 里砂 (アラブ イスラーム学院・金沢大学)

二大聖地マッカとマディーナを擁するアラビア半島のヒジャーズ地方では、イスラーム時代の最初の3世紀間(7~9世紀頃)、初期のムスリムたちによって、自然の岩壁面に数多くのアラビア文字のグラフィティが残された。それらの多くはアッラーへの祈願文、信仰告白などの短い定型文である。アンベールらによる先行研究では、年号の記されたグラフィティの分析により、文面の年代ごとの変遷が指摘されてきた。アンベールは、イスラーム時代最初期のグラフィティに宗教色は見られず、古代北アラビア文字碑文と同様、個人名を岩に刻んで残すことが目的となっていたこと、イスラームの伝統的なシャハーダ(信仰告白)の文面の登場に先立って、部族主義・物質主義的な一神教観を反映する信仰表明の文面が存在したことを明らかにし、グラフィティの文面が年代の指標となることを論じた(Imbert 2011)。しかし、これまでの研究に用いられた紀年史料の所在、刻者の出身は様々であり、より均一な背景を持つ史料を用いた分析も必要と考えられる。

そこで、本研究では、先行研究で明らかにされた文面の通時的変化が、同一地域・刻者集団によるグラフィティにも見られるのかどうかを考察する。2017年3月、発表者は、金沢大学とサウジアラビア国家遺産観光庁による合同調査隊(代表:藤井純夫教授)に参加し、サウジアラビア、タブーク州北部にて同調査隊が発見したグラフィティ群を調査する機会を得た。この調査では、ワーディー・アルヒルカにて105点、ワーディー・アルグバイにて9点の初期イスラーム時代のアラビア文字グラフィティを登録した。これらには紀年史料が存在しないが、グラフィティに含まれる人名の系譜により、32点のグラフィティがフルムズ、アブドゥルワッハブを祖とする2つの家系のいずれかに属することが判明した。次に、これらの系譜を手掛かりにグラフィティの刻まれた時期を4世代に分け、それぞれの文面の考察を行った。その結果、世代毎の傾向が明らかになり、同一地域・刻者集団における文面の通時的変化が確認された。しかしながら、近年マディーナ地域で発見された預言者ムハンマドの教友が残した7世紀のグラフィティの中には本研究結果に反する史料も存在する。したがって、グラフィティの文面は、年代の指標というよりも、おおよその傾向と捉えるのが適切であろう。さらに、本発表ではグラフィティの書体ならびにアラビア語の正書法にかかわる所見についても言及する予定である。

Imbert, F. 2011, "L'Islam des pierres: l'expression de la foi dans les graffiti arabes des premiers siècles," *Revue des mondes musulmans et de la Méditerranée*, vol. 129 (online version), URL: <http://journals.openedition.org/remmm/7067> (accessed on Aug. 30, 2019).

古典アラビア語文法における「主語」

榮谷 温子（慶應義塾大学）

アラビア語でいわゆる「主語」にあたる要素としては、al-fā'il（動作主）と al-mubtada'（主題、名詞文の主語）、ism（kāna や laysa などの主語）、さらには nā'ib al -fā'il（受け身文の主語）が挙げられる。そして、これらをまとめる用語として、al-musnad 'ila y-hi（動作主や主題などを包括した概念）がある。他方、これらの「主語」に対して、al-fā'il に対する fi'l（動詞）、al-mubtada' に対する al-khabar（主題に対する補語）があり、これらをまとめる用語として、al-musnad（動詞や補語など）がある。

musnad は、動詞 'asnada の受動分詞形である。動詞 'asnada はもともと「～を…に ('ilā) もたれかからせる」の意味であり、そこから「～を（文の主語となる他の語）に ('ilā) もたれかからせる」すなわち「～を述語にする」の意味となった。al-musnad「もたれかからせられたもの」が述語であり、al-musnad 'ila y-hi「それに対して（何か）もたれかからせられたもの」が主語ということになる。

しかし、初期のアラビア語文法学では、al-musnad が、文の最初の位置に来る要素ということで「主語」に近い意味で、al-musnad 'ila y-hi が、文の2番目に来る要素ということで「述語」に近い意味で、すなわち現在とは逆に用いられていたことが指摘されている。

他方、Sībawayhi の *al-Kitāb* においては、その「al-musnad と al-musnad 'ila y-hi」の章で、'abdu llāhi 'akhū-ka（アブドゥッラーはあなたの兄弟だ）と yadhhabu 'abdu llāhi（アブドゥッラーが行く）の両例文について、前者の 'abdu llāhi と後者の yadhhabu（彼が行く）を、また前者の 'akhū-ka（あなたの兄弟）と後者の 'abdu llāhi を同等に扱っており、「主語」「述語」という概念とはまた異なる扱いをおこなっている。

またそもそも、al-musnad 'ila y-hi という用語があまり用いられない、知名度の低い用語であったため、そのぶん緩やかに用いられることとなり、動作主や主題などすべて al-musnad 'ila y-hi と呼ばれるようになったという見解もある。そうであったとして、やはり、文法家たちも、al-fā'il（動作主）と al-mubtada'（主題、名詞文の主語）の何らかの共通性を感じ取っていたとは言えるだろう。

本発表では、曖昧模糊とした側面もある al-musnad 'ila y-hi の意味するところを通時的に確認し、古典アラビア語文法学における「主語」とは何かを明らかにしたいと考える。

自他動詞と形容詞から考えるペルシア語受身の存在の必然性

五十嵐 小優粒 (国際医療福祉大学)

これまでペルシア語の受身文については、その存在を認めることに対して肯定的か否定的かということや、研究者が各自、受身文だと主張する構文を論考の対象として挙げ、その構造や意味的特徴の分析が行われてきた。だが、ペルシア語における受身文は、その存在の有無を疑うべくもなく、ペルシア語の体系の中に必然的に、あるべくして存在する構文である。本研究では、このことを提示すべく、黒柳 (1996) と Dabīr-Moqaddam (1982) より、ペルシア語の自動詞・他動詞と、それから派生したと思しき形容詞と使役動詞を抽出し、受身形になる動詞とならない動詞の差異を分析した。

ペルシア語では「他動詞の過去分詞形 + šodan」がプロトタイプの受身形だとされているが、本発表では、この受身の構文のみならず、受身を構成しない自動詞や、他動詞の過去分詞形と同形の形容詞の存在にも着目する。動詞は、自動詞と他動詞のペアの有無から有対か無対かの2種類に分かれる。ペルシア語は、有対動詞の場合、その多くが自他同形である。この自他同形の有対他動詞が受身形になる場合は、自動詞文の自発と受身の意味を棲み分けるために受身形が必要であり、無対他動詞では、その欠損している自動詞の役割を受身形が担うと考えられる。本発表では、ペルシア語の受身形は、それを使用することで同じ動詞の意味に幅を持たせ、表現の範囲を拡大するという役割を担っており、確かにその存在意義があることを提示する。

また、例えば “ālūde šod” (汚染された) など、他動詞の過去分詞形+ šodan であるのか、これと同形の形容詞+ šodan であるのか判断が困難なケースもある。このような動詞と形容詞の連続性について、飯田 (2001) と渡邊 (2012) の英語における類似した事例に対する考察結果を参照し、ペルシア語のプロトタイプの「受身形に見える」構文の構成要素が、他動詞の過去分詞形なのか、同形の形容詞なのかについて考察する。その判断基準として、(1) 動作主が存在するか (人為的な行為か否か)、また、事象の他動性の高さ、(2) 「とても」や「より」で修飾や比較ができるか、(3) 状態性や結果の継続を表わしているか、(4) 対応する能動形があるか、の4点に着目した。ペルシア語には感情を表わす動詞そのものが非常に少なく、他動詞の過去分詞形と同形の形容詞でも、事象の結果残存や状態変化の結果継続を表わす。そのため、圧倒的多数の「受身形」が上記の(1)(3)(4)を満たしており、(2)を満たせるもののみが形容詞である可能性が浮上する。

反対に、結果が継続しない一回性の動作を表わす “būīdan” (においを嗅ぐ) のような動詞には形容詞が存在しないことが多く、受身形になりにくいことも判明した。

最古のクルド語文法書『ガルゾーニ文法』の研究

村上 武則（京都大学文学研究科・院）

Grammatica e vocabolario della lingua kurda はイタリアのドミニコ会宣教師であった Maurizio Garzoni によって 1787 年に著されたクルド語クルマンジー方言の文法書兼語彙集(『ガルゾーニ文法』と略)であり、全 288 頁中 60 頁程度の文法解説とイタリア語-クルド語の対訳語彙集から構成されている。クルド語の記述および学習を目的とした書籍としては現在までに確認されている限り最古のものであり、前近代期のクルド語資料としても極めて重要な位置を占めているが、名前は引用されても原文を通読した上で本書がクルド語研究に十分に利用されてきたとは言い難い現状にある。もっとも当時クルディスタンで活動していたイタリア人宣教師らは結局聖書のクルド語翻訳を成し遂げることも出来ずに終わったという事実から彼らのクルド語の知識や理解の水準があまり高くはなかったことは容易に察せられるが、イタリア語文法の諸項目に対応するものをクルド語の例で順番に挙げていくというスタイルで執筆された本書はおそらく著者本人が意図していた以上にクルド語クルマンジー方言の言語特徴を抉摘することに成功している。過去時制における主語代名詞の変化という現象そのものは観察しながらも「能格性」という概念を持たず、名詞の被修飾時に起る音節の追加パターンを語末音によって分類することには辿り着いても「名詞の性」というカテゴリーは導入せず、またペルシア語のみならずイラン諸語研究において後世広く用いられるようになる術語「エザーフェ」も使用せず、アラビア文法学にも通じていなかったであろう著者ガルゾーニがいかにしてオスマン帝国辺境の未知の言語を書き表そうとしたか、本発表ではイタリア語からの原典訳で辿るとともに、同時代のクルド語資料と照らし合わせた文法記述の妥当性および規範無き時代の文法そのものの不確定性の検証を試みる。さらに近代期以降にベディルハーン兄弟による標準化を経た現代クルド語文法との比較によって、共通文章語成立の過程で切り捨てられたクルド語の諸側面について遡及し、文語と口語の乖離というクルド語研究における長年の課題を念頭に置いて『ガルゾーニ文法』をいかに読み直すことが出来るかを提示したい。

ハランのサービア教について—『目録の書』と『古代諸民族年代記』を中心に—

江原 聡子（東京大学）

メソポタミア北限、歴史的に北シリアの古代都市として位置付けられるハラン Ḥarrān は、紀元前3千年紀から紀元13世紀まで3千年以上に亘る歴史を持つ。古代メソポタミア文明期の紀元前2千年紀初期から前6世紀に至るまで、ハランは主神である月神シンの宗教センターとして有名であった。またイスラーム期の9–13世紀においては、ハランは「サービア教徒の都市」*madīna al-Ṣābiya* として知られていた。

イスラーム期のハランのサービア教についての最も代表的な一次資料に、10世紀のバグダードの書誌学者イブン・アン＝ナディーム Ibn al-Nadīm (998年没)の『目録の書』*Kitāb al-Fihrist* (987/8) と11世紀のペルシア人科学者ビールーニー al-Bīrūnī (973–1048年)の『古代諸民族年代記』*al-Āthār al-Bāqiya ‘an al-Qurūn al-Khāliya* (1000頃)がある。両資料に記されているイスラーム期のハランの祭儀や神々を調査するうち、少なくともその神々の名や素性に、古代メソポタミア文明期に遡るものがあることに気づいた。祭儀の内容についても、ペルシアやギリシアの影響もあるものの、シュメルの時代に起源を持つと思われるものも見つかった。とりわけビールーニーは「ハランは月の所有である」と述べており、ウマイヤ朝期(661–750年)の人物と思われるハラン人預言者バーバーは、ハランのことをシリア語で「シンの都市」*mditteh d-Sīn* と呼んでいる。イスラーム期のハランでは、主神の月神シンと古代メソポタミアの神々の祭儀が、サービア教の名の下に残存していた。本発表では、イスラーム期のハランにおいて、古代メソポタミア文明期の神々や祭儀が生き残っていた様相を検証する。

初期の十二イマーム派における輪廻思想
—人間から動物への変態 (maskh) と靈魂の永遠性—

平野貴大 (東京大学)

発表者は別稿 (『イスラム世界』90巻、2019年、1-27頁) において、10世紀前半までの十二イマーム派 (以下、イマーム派) と極端派 (ghulāt) の間の教義上の境界線を分析し、イマーム派のハディース集における輪廻思想 (tanāsukh) を1つの主題として取り上げた。輪廻思想は極端派の指標となる教義と考えられているが、同論文では、預言者とイマームの中における聖靈の移動というある種の輪廻思想がイマーム派伝承集の中に見られることを指摘した。初期のイマーム派文献のさらなる読み込みを進めた結果、イスラーム思想史の中で輪廻思想に分類されてきた教説が他にも見出されるということが判明した。それらの教説とは、「人間から動物への変態 (maskh)」、および、「靈魂の永遠性」に関するものである。本発表では、10世紀末までのイマーム派の伝承主義的テキストの分析を通じて、「人間から動物への変態」と「靈魂の永遠性」の教説が、極端派に由来する輪廻思想であるのかどうかを検討する。

生きたままで人間が神の懲罰を受けて動物に変態するというモチーフはクルアーン 2章 65節などに見られるもので、イスラームの思想の枠から逸脱するものではない。イマーム派における「人間から動物への変態」という教説がクルアーン由来の思想であるのか、極端派の奉じる輪廻思想であるのかを判断するのは容易ではない。というのも、イマーム派のテキストでは変態が死をもって生まれ変わったことを意味するのかどうかに関する記述がほとんどないからである。発表者が調べた限りでは変態が死後に起こるということを明示する伝承がクライニー (al-Kulaynī, d.941) の伝承集に1つだけ収録されている。本発表ではクライニーのその伝承を後世のイマーム派学者がどのように解釈したのかについても分析することで、同伝承に極端派的側面を見出せるのかどうかを検討する。

「靈魂の永遠性」の教説とは、人間の肉体が創造される遙か以前に靈魂は影的世界 (aẓ illa) の中で創造されており、その後肉体が創造され、影的世界にいた靈魂と合体することで現世に生まれるという思想である。この思想は一般的に分派学書で「輪廻」の教説として挙げられるわけではないものの、ある種の輪廻論的様相をまとっていると言えよう。本発表では、「靈魂の永遠性」の教説は10世紀末まではイマーム派の主流学説であったが、11世紀のイマーム派学者たちがこの教説を輪廻論者に帰するようになったということを指摘する。

以上の分析を通じて、初期のイマーム派と極端派は明確な相違点を持ちながらも、輪廻論の一部においては未分節な教説が10世紀末まで存在していたということを明らかにする。

「陶酔」系スーフィーとその倫理性

井上 貴恵（東京大学）

スーフィズムにおいて陶酔的とされるタイプのスーフィーらに対しては、特にウラマーからしばしば異端的、あるいは不信仰者との周囲からの評価がなされることがある。しかしながらムスリムとしてのより良い生き方を模索する道の一つとして発展してきたスーフィズムにおいて、倫理的側面は常に重要視されてきたのである。

本発表は陶酔的とされるスーフィーらの倫理観について考察することで、陶酔的であるとして分類されるスーフィーらが有していたより良い生のための方法論を明らかにしたい。こうしたスーフィーらの思想形成の様子を概観しつつ、特にジャラルッディーン・ルーミー（d. 1273）と、彼の師として彼に多大な影響を与えたとされるシャムセ・タブリーズ（d. 1247）の思想から、「カランドル」系とされる思想において理想とされた人間像を明らかにしたい。

イブン・スィーナでつながる脳と経験と文法学

法貴 遊（日本学術振興会特別研究員 PD）

イブン・スィーナ（d.1037）の哲学の様々な部門において、カラムの学から影響を受けたと考えられる要素が見られることは、いくつかの先行研究で指摘されている。先行研究では、命題のレベルで確認できる両者の類似に注意が向きがちであったが、命題の分析方法や学術的言語の使用方法のレベルでも、両者の類似は見られる。この発表では、古典アラビア語文法学に端を発し、古典期カラムが発展させた述語分析の方法に注目し、この述語分析がイブン・スィーナ哲学の諸部門で重要な役割を担っていた可能性について考えたい。

古典アラビア語文法学とカラムの学において——アリストテレスの『カテゴリー論』の議論とは本来的に独立して——、1つの派生名（ism mushtaqq）、例えば‘ālim は li-shay’ ‘ilm という1つの文に分解されるが、この分析方法はアラビア語に翻訳された『カテゴリー論』における派生名の議論とも連動していった。カラムの学では li-shay’ ‘ilm の ‘ilm というマスダル（maṣḍar, 派生名の原型であり、動名詞）は、具体的な「もの（entity）」として指定可能な現実の行為を意味したが、アラビア語圏のアリストテレス伝統では、この語は現実の行為以外に能力（quwwa）も意味するようになった。イブン・スィーナはこの派生名の分析を、実体や偶有などの概念の考察や様相論理の分析などの様々な部門で応用している。

ところで、イブン・スィーナはアリストテレスの『分析論後書』に相当する箇所、経験（tajriba）について論じている。論理学用語としての経験は、例えば「スカンモニアは黄胆汁を下す」という判断を可能にし、かつこの命題に原因としての中項を与えるプロセスである。彼はこのプロセスに必要な2つの要素として、同じ条件の下で同じ現象が繰り返し観察されることと、脳の内部感覚の1つである記憶力（dhikr）と結合した推論を挙げている。イブン・スィーナの経験主義的側面については既に多くの先行研究がある。しかし、感覚で捉えられた対象を三段論法という特定の形式の言語で表現し、かつ原因としての中項を提示するまでに至るプロセスには、まだ解明されていない部分があると思われる。そこに文法的、カラム的な言語分析が関連していると思うのだが…。

はたして、脳と経験と文法学はつながることができるのか？脳の認識のプロセスをアラビア語で説明することによって生じる効果＝結果（effect）とは何なのか？そして、イブン・スィーナによる経験というプロセスの理解、ないしアラビア語で表現された限りでの論理学の理解は、経験主義的側面もある医学の探求を、どのように方向づけたのだろうか？

一方、12世紀のコルドバで思索にふけていたイブン・ルシュドの脳内でも、何かが起ころうとしていた…。

イスラームにおける医学の定義の伝統——『医学典範』後の展開——

矢口 直英（日本学術振興会特別研究員）

イスラーム世界の医学の歴史において、イブン・スィナー（1037年没）の『医学典範』は極めて重要な位置を占めており、数多の注釈書や要約書の対象となった。『医学典範』の冒頭では医学の定義が扱われており、諸注釈書がイブン・スィナーによる医学の定義に関して相互批判を展開してきたことは以前の発表で明らかにした。医学の定義は『医学典範』以外の医学書においても重要な主題であり、アラビア語で執筆された多くの医学書がその冒頭で医学の定義について扱っている。本発表ではギリシアの医学者ガレノスの著作がアラビア語に翻訳された9世紀頃から、13世紀頃までを視野に入れ、イスラーム世界で執筆された医学書における医学の定義の伝統を分析し、その変遷を明らかにする。

ガレノスが『医術』において「健康的なもの、病氣的なもの、中立的なものの学（ἐπιπρωτήμη）」と述べた医学は、伝統的に「医学」と「医術」、「学」（ilm）と「術」（ṣinā'a）の間に位置づけられて理解されており、イスラーム世界の医学者たちによって様々な定義を与えられている。たとえばイブン・スィナーは「医学は、現存する健康を維持し失われたそれを取り戻すために、人間の身体の諸状態が、健康になり得てまた健康から外れ得るものという側面で、そこから知られる学である」と言い、イブン・ルシュド（1198年没）は「医術とは、それによって人間の身体の健康を維持し病気を無くすことが追求される、真正な諸原理による行為的術である」と語る。このような医学の定義は医学が何であるかを述べるのみならず、医学の目的や区分についても規定しているため、医学者たちはさらなる議論を続けることになった。

医学の定義から派生したこれらの問題は『医学典範』注釈においても関心を集めている。ファフルッディーン・ラーズイー（1210年没）やクトゥブッディーン・シーラーズイー（1311年没）などの注釈者たちはイブン・スィナーによる定義を解釈し、それを修正あるいは発展させて、これらの問題に取り組んでいる。注釈者たちが議論する事柄には、彼らの医学理解が反映されていると考えられる。このようにして医学の定義を探ることで、当時の医学者たちが医学という学問領域をどのように理解していたのかを解明できるだろう。そしてこのことから、イスラーム世界における医者や医学を取り巻く状況を解明するための手がかりが得られるであろう。

イブン・アラビーの神秘主義的靈魂論の研究
—「魂」(nafs)・「心」(qalb)・「靈」(rūḥ)をめぐって—

相樂 悠太 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

従来のイブン・アラビー (d. 1240) 思想研究では後代に顕著な発展がみられた彼の存在論や形而上学が注目されることが多く、前代の思想伝統に連なる一人のスーフィーとして彼をとらえる視点は不足しており、彼以前の神秘主義思想の主要論題である靈魂論に関する彼の思想の解明は遅れている。

靈魂論 (psychology) の最も基本的な要素である「靈魂」(psyche) の概念を指すうえで用いられるスーフィー用語である「魂」(nafs) や「心」(qalb)、「靈」(rūḥ) などの概念を主題的に論じた記述の分析が、スーフィーの靈魂論に対する基本的な理解を提供することは確実である。しかしながら、この方法はイブン・アラビー研究にまだまだ十分に適用されているとはいいがたく、聖者論や人間論など、靈魂の問題に間接的に関わるにすぎない理論が彼の靈魂論として扱われることも少なくない。また、彼の思想に対する既存の研究では、人間靈魂を指す諸々のスーフィー用語を互換可能なものとして一括して扱う傾向がみられ、これらの概念間の相互関係の考察は遅れている。したがって、上記の用語の使い分けがイブン・アラビーの神秘主義的靈魂論の展開に与えた効果はまだまだ十分に明らかにされていない。

本発表は人間靈魂を指すスーフィー用語の中で最もよく用いられる「魂」・「心」・「靈」という三つの語に注目し、これらの概念を主題的に論じたイブン・アラビーの記述を比較検討するとともに、複数の用語を使い分けた彼の靈魂論的記述を分析する。これによって、それぞれの用語を用いて語られた彼の靈魂論の特徴を明確にするとともに、彼の思想における靈魂論的諸概念の関係性を明らかにし、従来の研究よりも精密に彼の靈魂論の構造を分析する。そして上記の作業に基づき、彼の靈魂論の全体的特徴をより多角的に考察することを目指す。

「魂」・「心」・「靈」のそれぞれに関して、語の原義、聖典における表象やそれをめぐって先行スーフィーが蓄積した議論をふまえてイブン・アラビーは固有の性質を有する教説を提示する。そのさい「完全人間」、「顕現」、「新創造」、「慈愛者の息吹」に関する彼独自の理論も応用することで、彼以前の単純な体験中心的教説が往々にして欠く存在論的な視点を自らの靈魂論に取り入れている。諸概念間の上下関係や優劣関係を示唆する記述も時にみられるが、必ずしも後世に発達したような単一の階層構造の発想がその背景に存在するわけではない。むしろ個々の概念が代表する靈魂の特殊相が固有の仕方では別個に積極的に価値づけられることが彼の靈魂論の大きな特徴である。

12世紀のマグリブ・アンダルスにおけるフトバ

野口 舞子（日本学術振興会／東京大学東洋文化研究所）

フトバは、金曜礼拝時をはじめとする宗教的特別行事の際に行われる講話として、イスラームの歴史を通じて行われてきた。本発表では、西方イスラーム世界で覇権を握ったムラービト朝（1060年頃-1147年）からムワッヒド朝（1130年-1269年）への移行期に相当する、12世紀に行われたフトバとその担い手であるハティーブに焦点を当て、当該時代のフトバのあり方を検討する。

フトバに関する従来の研究は、フトバで扱う内容が宗教的なものだけでなく、政治や社会を反映したものであったことや、フトバの中で支配者の名前を読み上げたことなどから、フトバと支配権力や支配領域との政治的・社会的関係について論じてきた。このため、本報告もまずは12世紀のフトバがどのようなものだったのかを検討し、既存研究との異同を明らかにする。具体的には、年代記や伝記集を使用し、どのような政治・社会状況の時にどのようなフトバが行われたのか、その担い手であるハティーブにはどのような者が就いたのか、彼らの学問修得状況や彼らが属した社会との関係を明らかにする。他方で、これまでの研究では、フトバの具体的な文言はあまり研究されてこなかったため、本報告では、年代記や選集、著作集に収録されたフトバの文言についても検討を行う。ムワッヒド朝期のフトバについては、すでに Linda Jones（2013, 2017）によって論考が著されているが、本研究では当該研究で等閑視されている個別のハティーブの状況の検討や、ムラービト朝期との比較を行う。

参考文献

- Jones, Linda G. (2017), *The power of oratory in the medieval Muslim world*, Cambridge: Cambridge University Press (Paperback ed.).
- Jones, Linda G. (2013), “The Preaching of the Almohads: Loyalty and Resistance across the Strait of Gibraltar”, *Medieval Encounters* vol. 19: Issue 1-2, pp. 71-101.
- Soulami, Jaafar B. (2019), “La chancellerie almohade de Tinmāl: l'imām Ibn Tūmart et la formation de la structure de la lettre almohade (515/1121-524/1129)”, *Arabica* 66, pp.327-340.

ティムール朝歴史編纂事業再考—『ジャアファリーの歴史』を中心に—

大塚 修（東京大学）

ティムール朝（1370-1507）3代君主シャー・ルフ（在位 1409-47）の治世は、大規模な歴史編纂事業が行われたことで知られ、ハーフィズ・アブルー（1430 没）を筆頭に多くの歴史家が活躍した時代であった。ティムール朝時代は、この時代を中心にペルシア語歴史叙述の発展を考える上で一つの画期とされ、多くの研究がなされてきた。しかしそれらの関心は、普遍史書（天地創造に始まり著者と同時代に至るまでの人類の歴史）には向けられてこず、多くの普遍史書は等閑視されてきた。その中に、後世の歴史叙述に大きな影響を与えた重要な非著名普遍史書がある。『ヤズド史』の著者として知られ、シャー・ルフにも仕えた大歴史家ジャアファル・ブン・ムハンマド・ブン・ハサン・フサイニー（生没年不詳）の手になる普遍史書である。彼は『ヤズド史』の他に、普遍史書を2点著しており、それぞれの手稿本が、現在サンクトペテルブルグ（National Library, Ms. PNS201）とコルカタ（The Asiatic Society Library, Ms. PSC8）に残されている。

ジャアファルの普遍史書については、碩学バルトリドが学界に紹介して以来、その存在こそ知られてきてはいたものの、そのテキストを学術的に検証した研究は少なく、史料性格すら確定されていない状態が続いている。サンクトペテルブルグ手稿本については、幾つかの校訂や翻訳が刊行されているものの（Ī. Afshār, “Chand Faṣl az *Tārīkh-i Kabīr*,” *Farhang-i Īrān-zamān*, 6, 1337kh, 89-158（部分校訂）；A. Zaryab, *Der Bericht über die Nachfolger Timurs aus dem Ta’rīh-i kabīr des Ġā’farī ibn Muḥammad al-Ḥusainī*, Ph.D. thesis to Johannes Gutenberg University Mainz, Mainz, 1960.（ドイツ語部分訳）；Ca’ferī b. Muhammed el-Hüseynī, *Tārīh-i Kebīr*, ed. Ī. Aka, Ankara, 2011.（部分影印付トルコ語部分訳）；Ja’far b. Muḥammad b. Ḥasan Ḥusaynī, *Tārīkh-i Awlād-i Tīmūr as Tawārīkh-i Mulūk wa Anbiyā’*, ed. ‘A. Zaryāb Khu’ī, Qom, 1393kh.（部分校訂））、いずれも部分的なものであり、何よりコルカタに残るもう一つの普遍史書との関係について十分な考察がなされていない。

そこで本報告では、この著者の手になる二つの異なる普遍史書の手稿本、サンクトペテルブルグ手稿本およびコルカタ手稿本を、文献学的手法を用いて分析することで、両者の関係を整理し、ジャアファルによる歴史編纂の実態を明らかにし、その上で、それをティムール朝時代の歴史編纂事業の中に位置付けたい。ティムール朝時代の歴史編纂事業を評価するためには、今後、未だに多くの残されている未校訂の歴史書の分析を進めていく必要があるだろう。

「デヴリーイエ」理論に関する考察—ニヤズイー・ムスリーの論考を中心に—

真殿 琴子（京都大学）

本発表では、17世紀オスマン朝下のスーフィー詩人である、ニヤズイー・ムスリー（d. 1694）の著作をもとに、「デヴリーイエ」理論に関して考察する。

真理たる唯一の神の存在から諸物・人間が顕現し、それらが再び神のもとへと還る道程を示す「デヴィル」（円）を題材にした著作群は、オスマン朝下の多くのスーフィー思想家・詩人たちによって「デヴリーイエ」と呼ばれ、ひとつの文学的ジャンルとして確立されてきた。「デヴィル」の存在は、ユヌス・エムレ（d. 1321?）を始めとするアナトリアを中心に活動した多くのスーフィーたちによって、主に韻文作品において示されてきたが、「シャトヒーエ」（酔語）同様、スーフィズム思想の中でも議論を呼ぶテーマとして扱われてきた。思想家やタリーカによっては、輪廻や受肉説などといった異端的な類似する概念や理論との混合が見られる「デヴリーイエ」理論は、本来「どこから来て、どこへ行くのか」という問いに対して答えを与えようとする、創造と回帰のモデルであり、存在一性論や完全人間論を基に発展した用語である。しかし、先行研究では、圧倒的な数を占める韻文作品群に焦点を当てた文学研究が多く、「デヴリーイエ」理論自体に関しては抽象的説明にとどめられる。

本発表では、ムスリーがオスマン語で記した『デヴリーイエ論考』を中心に扱い、ムスリーの解説を基に「デヴリーイエ」理論の解明を試みる。「デヴリーイエ」に関するムスリーの解説は、『デヴリーイエ論考』が後にイブラヒム・ハック・エルズルミー（d. 1780）による百科全書的著作である『智慧の書』において引用されたことからわかるように、オスマン朝下のスーフィーたちの中で広く通用したものであった。また、当論考は「デヴリーイエ」著作群においてもその理論モデルを散文によって解説しようとした、数少ない著作のひとつである。そこで示されるのは、絶対的な神の存在から顕現し、生み出される存在物の連鎖が完全人間の境地へと至ることで完結する「存在の円」（*dâire-i vücûd*）である。

オスマン朝時代から数々のスーフィー詩の題材になり、その抽象性から誤解を生み、議論を呼ぶこととなった「デヴリーイエ」理論を中心に扱うことは、オスマン朝スーフィズム研究においても新たな試みである。その理論解明にあたっては、従来の文学研究の手法とは異なる、存在一性論や完全人間論といった思想的背景を加味した哲学的な観点に基づいた分析こそが求められるのである。

ハナフィー法学派とシャフィイー法学派におけるワクフ（寄進財産）の基本概念をめぐって
—イスラーム経済学から見た考察—

KHASHAN AMMAR（立命館大学）

ワクフ（寄進財産）の起源は、預言者ムハンマド時代（西暦7世紀）にさかのぼり、正統カリフ時代以降に大きく版図が拡大したイスラーム地域において、宗教施設や病院、公園などの公共財の形成に用いられてきた。ワクフは社会の具体的な経済的要請に応じて発展し、イスラーム法におけるザカート（喜捨）が基本的な福祉的要素によって発展したのとは対比しうる。

しかし、ワクフは他のイスラーム経済的要素——リバー（利子）の禁止やザカート（義務的喜捨）など——とちがって、義務性のみならず最も基本的な概念をめぐってさえ、法学派間で論争と解釈をめぐる対立が激しく続てきた。そのためもあって、ワクフに対する伝統的なイスラーム法学派の諸見解と現代においてワクフを活用しているイスラーム経済との関係をめぐる研究も少ない。

本発表ではまず、イスラーム法の典拠であるクルアーンとスンナ（預言者慣行）の解釈において、ワクフの概念が、とくにハナフィー学派とシャフィイー学派の法学的解釈と制度的運用でどのような違いがあったのか、歴史的事態を史料と法学文献に基づいて明らかにする。その上で伝統的なイスラーム法学派と現代イスラーム経済におけるワクフとの架橋をめざして、現代のイスラーム経済学視点から、特にムハンマド・バーキル・アッ=サドルの理論を参考にしながら、イスラーム法学の伝統的なワクフ観、特にハナフィー法学派とシャフィイー法学派の見解の相違について考察を加える。

具体的に、本発表の中心になるのは、ワクフの本質はなにかという点である。つまり寄付性が貸与性かあるいは奴隷の解放のようなものかをめぐって、いくつかの意見がある。

この本質の定義の違いから、さらに重要な問題が生じる。つまり、ワクフ財産の所有権の移転をめぐるいくつかの見解の対立がある。「ワクフ」そのものが私財所有権の移転を永久に停止することを意味しているが、その停止の状態ワクフ財産の所有権が誰に所属するのかが、ワクフの本質をめぐる概念的理解によって異なっている。

以上のような論点から、イスラーム法学派、特にハナフィー学派とシャフィイー学派がどのようにワクフを理解したのか、または、現代イスラーム経済の発展に照らしてワクフの所有権はどのように理解できるのか、新しいアプローチを提案する。

18世紀オスマン朝イスタンブルにおける同業組合と宿所

岩田和馬（東京外国語大学）

近年のオスマン帝国社会史研究において、同業組合 *esnaf* といった集団を対象とした事例研究への注目が集まりつつある。こうした研究をさらに発展させていくためには、都市社会史の文脈の上で、都市に簇生する諸集団と特定の空間との関係を明らかにしていく必要があると考えられる。このような問題意識のもとで本研究は、解明が十分に進んでいない18世紀イスタンブルの都市未熟練労働者が有した構造を同業組合と宿所という二つの観点から分析することを目的とする。

本発表で分析の対象とするのは、「单身房 *bekâr odaları*」やハン *han* と呼ばれ、肉体労働者や同業組合の徒弟などが居住していた宿所である。こうした宿所は、これまでも同業組合との関係を指摘されてきたものの、特定の同業組合との関係を通じたそれぞれの宿所が有した性格の具体的な分析は十分に行われていない。このため本発表では、①イスタンブルに流入し都市下層社会を形成した「单身者 *bekâr*」と呼ばれる人々を内包する荷役組合 *hamal esnafi* や船頭組合 *kayıkçı esnafi* などの同業組合が有した社会構造を分析し、②こうした組合に所属する人々が居住した「单身房 *bekâr odaları*」やハン *han* と呼ばれる宿所を、上記の同業組合との関係の中から分析する。そして、宿所の所有者、管理者、宿泊者をそれぞれの関係の分析を通して、これまで都市未熟練労働者の居所として一括されて考えられてきたこれらの宿所の分類を行う。

本発表では、イスタンブル法廷台帳と保証人台帳を中心的に利用することで、同業組合と宿所という二つの局面から明らかになる都市未熟練労働者を取り巻く社会構造を示す。

1860年代前半のオスマン帝国における移民町形成と地元社会
—テクフルダー県サライ郡で新設されたクリム・タタールの町の事例から—

成地 草太（明治大学大学院）

クリミア戦争（1853-56）後から1860年代にかけて、ロシアの支配を逃れて新たな庇護を求めたクリミアとコーカサス地域のムスリムはオスマン帝国領に続々と押し寄せた。オスマン帝国はこれら全てのムスリム難民 *muhâcir* を受入れ、バルカンとアナトリアの諸地域へ移送し、既存のないし新設の町や村に定住させる政策を展開した。先行研究でも明らかにされているように、この難民定住事業は中央・地方政府が指揮・実行したことに加えて、定住先周辺の地元社会の住民も金銭・物資の寄付や労働を通して貢献した。その意味で定住事業は国家の公的支援と社会の慈善・奉仕活動との両輪で支えられていた。しかし、難民の定住過程への地元社会のかかわり方や役割の重要性は具体的に明らかでないところが多く、またその意義についても評価が定まっていない。

本報告は、大統領府オスマン文書館所蔵の文書群と官報・新聞の記事とを史料として、地方統治制度の最小単位の一つである町 *kasaba* の新設過程を検討することで、難民定住政策・事業への地元社会のかかわり方と果たした役割とを具体的に明らかにすることを目的とする。研究対象として、史料が豊富なトラキア地方のテクフルダー *Tekfurdağı* 県サライ *Saray* 郡内のマニカ *Manika* 川沿いで1860年代前半にクリム・タタール難民が定住することで新設された町（現在のテキルダー *Tekirdağ* 県サライ市ブユク・ヨンジャル *Büyük Yoncalı* 村）の事例に焦点を当てる。一連の難民定住方針や各州総督・県知事に宛てられた諸命令から明らかのように、中央政府（大宰相府）は難民定住事業のために定住先の地元社会による支援を不可欠と考えていた。1861年5月、サライ郡内に県の主導でクリム・タタール集団が移送されたが、その規模は1840年のサライ郡総世帯数の約六割にも相当するほど大きなものであった。このタタール集団の定住のために必要な家屋と新モスクの建設は、サライ郡内だけでなく周辺諸郡住民等の資金・資材の提供と建設作業への参加によって実現された。他方、中央・県政府は土地の配分や定住した貧民への生活支援をし、さらに町建設での郡住民の貢献を感謝とともに官報・新聞上で報じることで、オスマン社会に対して難民支援の慈善活動展開と順調な難民定住事業とをアピールした。本事例からは町の建設が地元社会に負担されていたことが明らかになったが、同時にそれはクリミア戦争後の財政難にあったオスマン政府にとって効率的かつ不可欠な方法であったともいえる。難民の大量流入は帝国中央と地方にとって危機であったが、その対応として各地方社会の富と労働力の出動が重要であったという点も、この事例から理解できよう。

20世紀初頭オスマン帝国における「3月31日事件」と宗教学生の事件参加

矢本 彩（明治大学・大学院）

20世紀初頭オスマン帝国で発生した「3月31日事件（31 Mart Olayı）」（1909）は、青年トルコ人革命（1908）に対する反革命と評価されることがしばしばあるが、軍人や政治家、そして宗教関係者や外国人も参加する社会反動・デモという性質を内包した事件だった。その参加者の多様性からもわかる通り、事件が起こされた原因も単一のものではなかった。たとえば青年トルコ人革命が起こされたことによって、読み書きを不得手とする叩き上げの軍人が大量に解雇され、その欠員を補填するために、徴兵を免除されていたマドラサで学ぶ宗教学生（Talebe-i Ulum）への徴兵免除試験の再開が決定された。この決定によって軍人、宗教学生の双方が不満を抱いた。

このような理由に政治的な要因が加わり、事件はおもに軍人によって担われ、事実「3月31日事件」後に記された記録の限りでは被処罰者625人のうちその35%ほどが軍人であった。政府関係者も多数失職し、最終的にはスルタン・アブデュルハミト二世までもが退位させられる結果となった。一方で、首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティ（Derviş Vahdeti）の刊行した新聞である『火山 *Volkan*』紙に、宗教学生が多数の記事を寄稿し、「3月31日事件」の現場でもその存在が確認されていたにもかかわらず、ウラマーと学生を合わせても処罰対象とされたのは被処罰者625人のうちわずか10%ほどであった。

本報告は、大統領府オスマン文書館所蔵の大宰相府文書局（Babali Evrak Odası）文書および、『火山』紙の記事をもとに、「3月31日事件」における宗教学生の立場を明らかにすることを目的とする。事件前後の学生の動向と、彼らを取り巻く状況を明らかにするとともに、事件へ関与するに至ったその原因と過程を解明する一助とする。

参考資料

- ・ *Volkan Gazetesi*（『火山』紙、第1-110号 1908年12月11日-1909年4月20日）
- ・ DÜZDAĞ, Ertuğrul M, *Volkan Gazetesi*（『火山』紙）, İstanbul, 1992.

近代エジプトにおけるイスラーム主義とキリスト教宣教団体
—反宣教運動の言説に関する一考察—

福永 浩一（上智大学）

本報告では、1920 年代後半から 30 年代前半にかけてエジプトで顕在化した、イスラーム主義勢力による、同時代のプロテスタント系宣教団体に対する反対運動に焦点を当てる。

エジプトは 1882 年に英国の占領下に置かれて以降、英国聖公会宣教協会（Church Missionary Society, CMS）や、北米統一長老派教会（United Presbyterian Church of North America, UPCNA）をはじめとする、米国・ヨーロッパに本部を置く多数の宣教団体の進出が活発化し、学校や病院の建設、出版、宣教を行った。彼らはカピチュレーションの恩恵の下、教育や医療の分野で幅広い活動の自由を保障されていた。しかしその活動は、エジプト人の植民地支配に対する抵抗の中で、イスラームの価値観を重視したナショナル・アイデンティティ形成の動きが顕在化する 20 年代末以降、強い警戒と反発を呼び起こすようになる。特に、この時期に設立されたイスラーム主義系の組織や雑誌は、宣教団体の活動に反対し、ムスリムへの影響力拡大と改宗の阻止を重要な課題と捉えていた。

それらの刊行物において、エジプトで実際にムスリムが宣教を通じてキリスト教に改宗した事例はごく少数であったにも関わらず、支配的な西洋に対し弱者の立場にあるムスリムの改宗の「危険性」が、反宣教運動の盛り上がりの潮流も踏まえて繰り返し訴えられている。また、イスラーム主義者が宣教団体による諸活動を、イスラームの価値観を否定する行為と見なしていた事、宣教団体のサービスに依存するエジプト人ムスリムの「救済」が、イスラームのアイデンティティ回復とウンマの防衛に繋がるという認識を有し、対抗する形で出版物の刊行や福祉・教育活動を普及させた事などがうかがえる。

本報告は 26 年にカイロで刊行されたイスラーム主義の先駆的雑誌「*al-Fath*」、および 33 年より刊行されたムスリム同胞団の新聞「*Jaridat al-Ikhwān al-Muslimin*」を主な史料として、宣教団体を扱った記事や論文の内容の一部を取り上げ、上記のイスラーム主義者の認識の具体例を紹介する。その上で、イスラーム主義思想と運動の形成に、宣教団体が及ぼした影響と意義を考察する事を目的とする。

クフ王第2の船・銅製部品が装着された板状部材の機能同定

柏木 裕之（東日本国際大学）

山田 綾乃（東日本国際大学・早稲田大学）

エジプト、クフ王のピラミッド南脇で進行中の「クフ王第2の船保存・復原プロジェクト」（日本側代表：吉村作治東日本国際大学学長）は、部材の取り上げが9割程度完了し、船の全体像が明確になってきた。この船の規模や様式、構造や技法は隣接する第1の船と強く類似していたが、一方で第1の船には認められない、第2の船独自の部材も複数発見されている。第2の船固有の部材は、この船の役割を解き明かし、2隻の関係を究明する手がかりとして注目される。本ポスター発表では、第2の船独自部材のうち複数の銅製部品が装着された板状部材を取り上げ、その機能や設置方法について考察を試みている。

板状部材は船を納めた堅坑（船坑）の南北壁際に、3枚ずつ重なるように置かれていた。観察の結果、3枚を一行につなぎ合わせた、長さ約24m、高さ約45cm、厚さ約5cmの2組の板状部材に復元された。板の長辺には「レ」型と矩形の欠き込みおよび小貫通孔の3つが、ひとつのセットとして、約90cmごとにそれぞれ26カ所備えられていた。「レ」型の欠き込みは銅の板金で覆われ、また各板の端部と中間には、「コ」型に折り曲げられた厚い銅製金具も取り付けられていた。「コ」型金具の2つの先端には孔が開けられ、その設置や「レ」型金具の方向から、2組の部材は対の関係にあったことも判明した。

「レ」型の欠き込みが並ぶ板状部材は、高官ティの墓やウセルカフ王、サフラー王のピラミッド複合体の壁面レリーフに加え、アブ・シール南遺跡のマスタバ墓（AS68）から出土した模型船でも認められ、部材は船縁の直上に設置されていた。また部材の上に櫂が並べられ、背後に漕ぎ手の姿を描いた例も見られた。設置場所などから判断し、この部材は櫂に関わる可能性が高く、「レ」型の欠き込みは櫂を受ける、いわゆるオールクラッチと同定された。

同様の特徴を備えた第2の船の板状部材も、3枚一組の部材として両船縁に設置され、櫂を支持する役割を果たしていたと類推された。更に船坑内における部材配置の傾向として、北側には右舷の部材が、南側には左舷の部材が納められており、板状部材もこれに倣うと、それぞれの「レ」型の向きはレリーフの図像と一致していた。

船体はダボとロープで互いに連結されていたが、第2の船の板状部材にダボ穴やロープ穴はなく、船体側にもこの部材を取り付けるための特別な加工は認められなかった。板状部材以外にも第1の船で用いられていない部材が複数見つかっており、これらの部材と「コ」型金具を用いて板状部材は固定され、更に操櫂手の座面も用意された可能性が考えられる。

本発表では独自部材の実測図とともに、固定方法の試案を提示し、妥当性を問いたい。

ダハシュール北遺跡シャフト 158 の出土遺物と利用歴

矢澤 健（東日本国際大学）

吉村 作治（東日本国際大学）

柏木 裕之（東日本国際大学）

山崎 世理愛（早稲田大学）

2019年に発見されたダハシュール北遺跡 158号シャフト墓は、同遺跡の中王国時代後期の墓で最大であり、希少な副葬品が良好な状態で発見された。本発表では、遺構に残る痕跡から推測される墓の利用歴と、出土主要遺物について報告する。

遺構は、深さ10mのシャフトの底部から南に地下室が設けられ、地下室中央部にも深さ1.9mのピットが掘削されていた。壁龕は2つあり、それぞれ地下室の東壁と、ピット東壁に設けられていた。地下室の東壁と西壁には最上部に間隔を置いて2つの横穴があり、これらはピット上に丸太を架けるための受け口と推測された。また、ピット上部の南北方向にも丸太を架け渡した痕跡が認められた。地下室内部での移動でこうした設備が必要な重量物は石棺以外考え難いが、棺の破片等は発見されなかった。おそらく当初は石棺がピット内部に収められ、再利用を目的として搬出されたと推測される。

シャフト最下部はタフラ（岩盤）の層が地下室入口の天井の高さまで堆積しており、締まりが強く、意図的に充填されていたと推測される。地下室入口側のタフラは盗掘時に掘削されていたが、石棺の搬出に十分な空間は無かった。また、地下室内のピットはタフラの層によって埋められていた。上記のように石棺の搬出を想定するならば、ピットの埋め戻し、シャフト下部のタフラの充填は、石棺搬出後に行われたことになる。石棺搬出後のタフラの意図的な充填は、この墓が再び利用された可能性を示唆している。ただし、本論はあくまで1つの墓を対象として間接的な証拠から組み立てられた仮説であり、最終的な結論については隣接する同規模の墓の調査を待ちたい。

地下室の入口前、シャフト部の床面付近からはファイアンス製、石製、青銅製の小型の遺物群がまとまって出土した。ファイアンス製品は動物や蜂を象った小像や、容器、板状の台、ビーズ類など、石製品は小型の容器などがあった。青銅製品はナイフ、鎖状の遺物、印章などが発見された。同種の遺物群はエジプト各地で散発的に発見されているが、多くは詳細な出土位置・状況が明確に記録されておらず、どのような目的で使用されたのか、不明な点が多い。本例のように出土状況が明確で、まとまって発見された例は希少であり、遺物の用途を検討する上で重要な資料となり得る。

ツタンカーメン王墓出土の「第2の国王のチャリオット」の復元について

河合 望 (金沢大学)

岡田靖 (木製彫刻文化財保存修復研究所)

松島朝秀 (高知大学)

栗本康司 (秋田県立大学)

大山幹成 (東北大学)

大石岳史 (東京大学)

影澤政孝 (東京大学)

Gilan Mahmoud Gamal (大エジプト博物館保存修復センター)

Ahmed AbdRabou Ibrahim (大エジプト博物館保存修復センター)

Hanan Mostafa AbdEl-Aziz (大エジプト博物館保存修復センター)

Mohamed Moustafa Mohamed (大エジプト博物館保存修復センター)

Ahmed Tarek AbdEl-Aziz (大エジプト博物館保存修復センター)

Soraya Muhammed (大エジプト博物館保存修復センター)

Hussein Kamal (大エジプト博物館保存修復センター)

現在エジプト・アラブ共和国で建設が進んでいる大エジプト博物館への国際協力の一環として、国際協力機構(JICA)はエジプト考古省と合同で2016年11月より「大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト(GEM-JC)」を開始した。本プロジェクトでは、カイロ・エジプト博物館に収蔵されていたツタンカーメン(トウトアंकアメン)王墓出土遺物の移送とそれに伴う修復を実施してきた。このプロジェクトの一環として発表者はツタンカーメン王の所謂「第2の国王のチャリオット」(GEM4940; JE61990)を大エジプト博物館への移送前に状態を診断するため精査した結果、古代にチャリオットの車体の表面に何かが装着された痕跡を確認した。これについてはツタンカーメン王墓を発掘したカーターの助手であったアーサー・メイスがこれらの痕跡について簡単な記録を残すのみであったが、2012年にエドウィン・ブロックが「天蓋」が装着された後であるという仮説を提示した。しかし、彼は遺物の採寸を行うことができず、あくまでも推測にすぎなかった。発表者は第2のチャリオットと天蓋について採寸を含めて精査し、ブロックの仮説を証明することができた。またブロックが言及していない新たな知見を得ることができた。本研究発表は、我々の調査に基づくチャリオットと天蓋の接合と3Dスキャンによるヴァーチャル復元について報告し、大エジプト博物館での新たな展示方法についても提示する。

エジプト、ダハシュール北遺跡の青色彩文土器

高橋 寿光（東日本国際大学）

東日本国際大学／早稲田大学が発掘調査を実施するダハシュール北遺跡は、エジプト、カイロ近郊のダハシュール遺跡の赤いピラミッドから北北西に約 2km の砂漠の中に位置する中王国時代から新王国時代の墓地遺跡である。本発表では、青色彩文土器研究の一環として、当該遺跡から出土した青色彩文土器について概要を報告するとともに、生産地に関する考察を行う。

ダハシュール北遺跡から出土した青色彩文土器は、第 18 王朝後期のアマルナ時代、第 18 王朝末期のポスト・アマルナ時代、第 19 王朝に年代付けることができる。多くが地上から発見されていることから、墓の地下埋葬室で副葬品として使用されたのではなく、地上の礼拝施設において埋葬儀式に使用されたと考えられる。

当該遺跡の青色彩文土器は、第 18 王朝後期のアマルナ時代までは、近隣のサッカラ遺跡などとの類似が見られ、同一の工房で製作されたと考えられる。一方、第 18 王朝末期のポスト・アマルナ時代以降では、遠く離れたルクソール遺跡などの青色彩文土器はもちろんのこと、近隣のサッカラ遺跡などの青色彩文土器と比較しても器形や装飾に若干の相違が見られるようになる。また、第 19 王朝では違いが顕著になる。発表者は、これはポスト・アマルナ時代以降において、青色彩文土器が地域ごとに独自に生産されるようになった結果と解釈する。

スーダン国立博物館所蔵鉄製品の形式学的検討

関広 尚世（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）

スーダン国立博物館には、1960年代のヌビア遺跡群救済キャンペーン等で出土した鉄製品が所蔵されている。これらの資料には、古代スーダンの物資文化を明らかにするための重要な手掛かりが多く含まれているにもかかわらず、収蔵庫に眠ったまま、活用されていないのが現状である。そして、研究者の記憶からもその存在が薄れつつある。

今回、調査研究の対象とした鉄製品は、11遺跡、71点で、装身具や武器が中心である。出土地は、下ヌビア地域とメロエ地域に集中し、後者にはハルツーム市内の立会調査出土資料を含む。本発表では、出土遺物の形式学な検討結果を提示する。なお、その歴史的意義については、口頭発表で述べる。

本研究資料には現在の主要観光地もふくまれている。2017年は、国連が定めた「開発のための持続可能な観光の国際年」であった。こうした過去の調査資料の活性化を行うことで、文化財が国際的な目標達成にも貢献できるようなモデルケースづくりをする。

《明治大学駿河台キャンパスへのアクセス》



【最寄駅からのアクセス】

■JR 中央線・総武線／御茶ノ水駅（駅番号：JC03・JB18）下車徒歩約 3 分

■東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅（駅番号：M20）下車徒歩約 3 分

■東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅（駅番号：C12）下車徒歩約 5 分

■都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅（駅番号：I10・S06・

Z07）下車徒歩約 5 分

《明治大学駿河台キャンパスマップ》



〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 (TEL 03-3296-4545)

【リバティタワー】

- 1F 1011教室 (公開講演会・学会奨励賞授賞式会場)
- 6F 1065教室 第1部会
- 7F 1073教室 第2部会 1074教室 第3部会
- 8F 1083教室 第4部会 1085教室 第5部会
- 9F 1096教室 第6部会
- 16F 1163教室 (ポスター発表)

*コアタイム (12:50~13:20) 以外は休憩室としてご利用いただけます。

- 17F 学生食堂 *土曜のみ
- 23F 宮城浩蔵・岸本辰雄ホール (懇親会会場)

【休憩施設・売店など】

- ・ラウンジ・マロニエ (リバティタワー1F 地図上A)
- ・カフェ・パンセ (アカデミーコモン1F 地図上B) *土曜のみ
- ・明大マート (大学会館地下 地図上C) *土曜のみ
- ・サンマルクカフェ (グローバルフロント隣接)

日本オリエント学会第 61 回大会実行委員会

委員長 江川ひかり

委員 奥美穂子、瀧口美香、平野豊、横田貴之、吉田達矢（五十音順）

事務局 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

明治大学研究棟 912 号室 江川ひかり研究室気付

e-mail: orient2019@meiji.ac.jp(事務局長 横田貴之)

2019 年 9 月 30 日発行